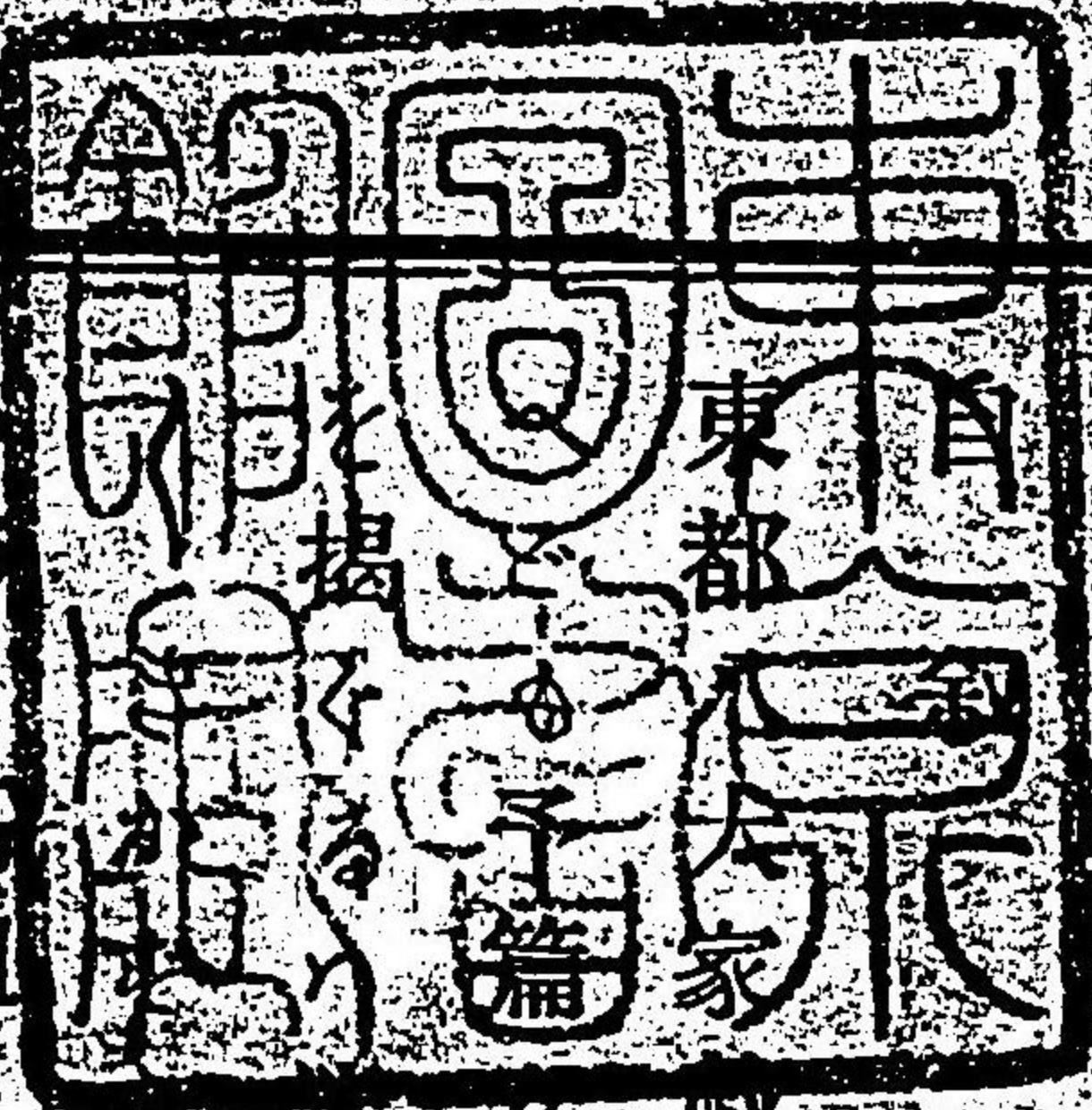


67-88



東都

大家

文

集

卷

之

八

威文稿成る書肆來りて序をもかけよと請
 みか玉をつらねたるまへに泥の如き文
 惑ありとてゆるさきされども書肆をか
 て目くそれ聖人の論語おも朱子のま
 らあり高祖のまへは陳涉のさきほうあり芝居の幕
 明は仕出あれハ先生おもせひに幕明あらんとと
 せちよ乞ふによりて予遂にゆるしてさらハ即席にち
 よッびり書くべしとて筆とりたれどもおちけ
 きて更に思案がいで之墨を吐るる半時はかりあて

東都大家文集卷之八

あきうすぎ硯の水もあらすして

鵜の直似とするからす羽の文字

と書けハ書肆傍よりしてそれは先生の御作よてみや
と問ふ予答へていな苦しいまよにちよツと古人の作
と首よ置ておれから文をつゞくるなりといへハ書肆
あまりよ待どほなればそれおてよとといふゆゑさら
ハ予も仕合なりとて筆を投すれば書肆思索たらしく
にて去りぬ

明治十五年十一月醉書といひたいが下戸なれば茶
よろかされて

春風居士 ゑるす



○ 風來山人小傳

平賀氏名の國倫、字の士舜、通稱を源内といふ風來山人、其
 号あり又外よ天竺浪人鳩溪、紙爲堂、福内鬼外等の數号あり
 讀岐の産あり江戸へ出て物産を學び田村元雄の門に入り
 本草にくいのしきを以て頗る名あり蘭學を旨として著書ま
 た多し嘗て和蘭人の家にいさりしに蘭人一齋を出し衆に
 示していにくよく蓋口をひらく者あらばこれを贈るべし
 と風來齋をとり立るにこれを聞きかば蘭人大に驚歎せ
 りといふ風來又越歴機と傳へたり其事蓋し安永年中あ
 り緒餘又院本を作り神靈矢口渡等尤も世上に行はる



○蜀山人小傳

太田氏名の草通稱の直次郎南畝と号し又蜀山人と号す其
 他尙や數号あり世々徳川氏に仕ふ寛政の初昌平登に於て
 學問吟味に應じ甲科の賞を得たる學者なりしが晩年の世
 と玩びて狂歌を嗜み口を衝て出るものことごとく人をし
 て願を解し先又世を諷し俗を論すお足る者おほし當時稱
 して無双の才子とせり擢られて幕府司計吏とありたれど
 も性淡泊にして俗務に拘りらず嘗て竹橋官廨に蓄ふると
 ころの古籙記の調査を命せられしが時適ま五月の交あし
 て梅雨蕭々たりしかば狂歌を詠しく曰く五月雨や日もた
 け橋の反故まらべ今日もふるてふ明日も古帳其滑稽洒落
 大率この類あり墓の駒込本念寺にあり



松崎の吟光

○式亭三馬小傳

菊地氏名久徳字の太輔通稱を西宮太助といふ式亭三馬
 の其号あり父の八丈島ある爲朝神社の祠官菊地某の子菊
 地茂兵衛といふ三馬江戸淺草田原町に生る幼にして奇才
 あり十八歳の時より戯作書を著し其名都鄙に聞ゆ其住居
 一ちらずといへども後本町二丁目に移り軒を商家に並べ
 藥を鬻ぐを以て業とし巧に世を紙筆の間に玩べり文政五
 年病にかゝりて没す享年四十七歳なりしといへり其墓の
 深川雲光院にあり本町巷四季亭洒落齋吟樓遊戯堂等
 とおその別号あり



○曲亭馬琴小傳

馬琴氏の瀧澤通稱の瑣吉後清右衛門と改む其先三河又出づ曾祖名の興也といふ者武藏國埼玉の人真中全直の次子興吉を養ふて嗣とあす真中の源頼政の勇臣猪俣太守資より出づ興吉の子興義兵法に通し撃劍射騎をよくす馬琴の其季子あり少ふして書を讀み長して著作を好み自ら其堂を名づけて著作堂といふ寛政二年の冬書双紙二卷を編て刊行せしが書を著すの始めにして此時の二十四歳なりしといへり終身編む所の書殆ど三百種に及ぶ其没年の嘉永元年十一月にして享年八十二歳ありしといふ其遺民といふの文政年中剃髮せし後の稱なり

東八大家文上編乾目次

- 細見鳴呼御江戸序
- 豆男書卷序
- 送麻疹神表
- 再編胡蝶物語序
- すり小木のこと
- 道中膝栗毛序
- 契情四十八手叙
- 風月春告鳥の序
- 花情
- 麥飯報條
- 道外物語序
- 寄者評判記跋
- 道行風の妹脊筋
- 烏亭焉馬七袞壽詞
- 浮世風呂大意
- 青樓晝夜の世界錦裏序

風來山人
蜀山人
式亭三馬
曲亭馬琴
蜀山人
三十返舎一九
山東京傳
雲永春水
風來山人
式亭三馬
全
風來山人
蜀山人
式亭三馬
山東京傳

- 太平樂卷物序
- 書齋帖序
- 癩疹戲言跋
- 藏子名所圖會序
- はこいり嗽石香口上 代作
- はみがき
- 雙蝶記序
- 風流庵報條 代作
- 神靈矢口渡跋
- 飲酒法令
- 傾城鱧
- 心猿辨
- 猿寺禪師七十賀詞
- 放屁論自序
- 通言總雜序
- 十八羅漢圖讚序
- 雜誌紙屑籠序
- 坐敷藝忠臣藏序

風來山人
蜀山人
二式亭三馬
三曲亭馬琴
風來山人
一山東京傳
式亭三馬
風來山人
蜀山人
山東京傳
曲亭馬琴
蜀山人
風來山人
山東京傳
十返舎一九
山東京

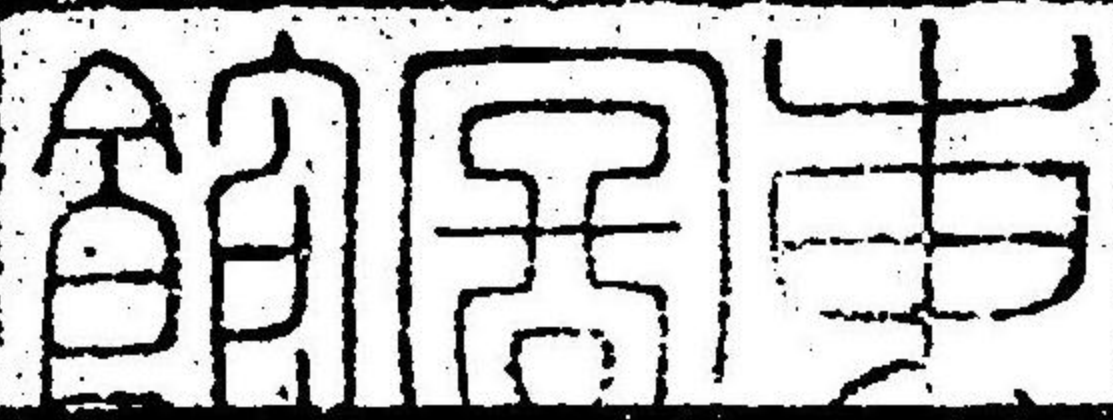
東八大家戯文上編乾

○細見嗚呼御江戸序

春風居士選

風來山人

女街女を見るに法あり一に目に鼻すぢ三に口四あはえ
ぎの眉の凝る脂のことし齒の鑷屏のことし家くの風好
くの顔尻の見やう親指の口傳ありてこれを撰むと等閑
なれどあるものバ角かく柳の聚なるハ華かく智ある
の醜す美しきに馬鹿あり静あるハはりかく賑されバさや
んち顔と心と風俗と三拍子揃ふもの中座とあり立者と
呼ぶ人の中ハ人かく女郎の中に女郎まれあり貴かな得が
たきかき或ハ骨太毛むく亥やれ猪首獅子鼻欄尻虫喰栗の
も引々四ツの前後に至れば餘つて捨るハ一人



もあく廣いところがア、お江戸あり

○豆男書巻序

蜀山人

伊勢物がだりのまめ男のまめやかある男あるべきを形の
ちひさき豆にふどへて色事の腕豆まめふかさるせしり一
合八文舎のふいぬれにして大通豆の世のおとさある青
豆の青黛黒豆の黒仕立枝豆の枝をかはし羽根をならぶる
鷹くひ豆も鬼うち豆のとしをかさねて座禪まめのさとり
をひらく豆右衛門のむかしがたりを鳥文齋の筆まめに糸
がかれし一卷ふわが口豆の序をそへよと豆のまめがら七
あゆみ七里かへりてくふみそ豆にうらまめのそらごとを
まへてしるす

○送麻疹神表

式亭三馬

春はをし郭公はたさかまほし思ひわづらふきのふけふか
あどよとたる歌にひき風のひさかはりてことしの夏の
はじめの頃より男と女となくとしの程三そちこそらこ
らの人く寐るのをし醫者の薬のさかまほしとしかわ
づらふきのふけふかあどらうめきつゝ呑食ふもの味ひ
だにさらにしらぬひのつくねんどたい十二日のひだつと
のみを指をかいてぞ打伏けるそのさま貴き賤きのわか
ちもあく上玉たれの小簾のひまもる升麻劑の匂ひ奇南
の香よりも高くかはり下りゆや一の馬追ぬをのこまで咽
喉のしはがれたる聲作りして竹又雀のしなよくとまると
めてとまらぬ咳嗽をあん苦みけるかゝれば三戯場のやぐ
ら暮も發熱の汗とともいたづらにしぼり上れば金主の

頭痛の燥鱈人の炙魚的と俱に大抹額のあひれあるさま
 り貨食者麩家も麻疹お付經商休の招状を出し段正舖にも
 おあいくの聲絶る中あいかかれバ又貨郎店を出す者の
 許多ぞやその甚し事小戸大戸といはず是をかぞへな
 まことおはく程とよそいふべけれ湯屋の管長の常の居眠
 に増を加へ出入の髪頭家の思ひの外お廻る事頼あり祈禱
 の法印の呪術の守護を出せバ五社の廟官劣らじと護符を
 施す或の名方を書て廣るあれバ或の禁忌を寫てとらす
 もありて麻疹の猛威いよく盛んにおはします物から
 傾城の衰あるや鼻衄の夥しきを見て貯藏の起請をもか
 くまくおもひ彩粉房は浮説のまても嫖客の噴嚏をするの
 みよて都て通ひ來る者少し只麻疹訪安否の驛使のみ晝夜

をたてくだしよくだして菰街の裏門魚鳥留の禁物にさみ
 しく楊橋橋坊の三絃の話もなくて藥研の音のみかまびす
 し藥材容の賑ふのみあらす草澤醫も効を顯さんと麻疹精
 要卒然お聞記じ葛根湯に休むひまきく時を得顔に誇ると
 いへどもことしの勝てよきものよけれバ稚さものの鈴付
 たる猴お杵めきたるものともてあそびつかとあしきもの
 もさせるくるしみもあけれバまめやかある命定ともいふ
 あるべし夫麻疹の天行の疫邪によりて發るとありて十二
 支のめぐりのころにやるよしを檮書にもいへり南人の
 これを歎瘡といひ北人のこきを瘡瘡といひ吳に痧疹とい
 ひ越え瘡瘡といふの姓名なるか字號なるか俳名なるか表
 徳あるるも証号なるかろも混名あるか就れ本名紛しき

東...

病名ありとて我大御國のやまとたましひ些些を字義に
 かまひゆさぬと唯手がるくハシカと訓じて通用す其舊古
 の紀記を索るよ稻目瘡とあり赤瘡瘡とあるの今いふ麻疹
 の事あるよし本居大人が説も見たり亦似た物の痘瘡瘡疹
 といへども侶ぬ物もまた痘瘡瘡疹あるべし形容同ふして
 必に異なるをたとへバ水瘰と冬葱のごとく淨と譚又淨の
 如しされども世俗侶た物あれば是を菖蒲と杜若にたぐへ
 て彼を媚定とし是を命定とす瘡疹の命定にあらす痘瘡命
 定なるべし夫のともわれ此のろの人の痘瘡鬼の合棚に瘡
 疹の神のあるとまで心得けん源八も老陸も執りつかれし
 とおそれあへる片腹痛死事あれどもしばらく俗よしなが
 ひてさらば神どもすべけれと痘瘡神の棚お祭りて赤い蓋

しをさらげ立木兎のお伽もあれど瘡疹の神といふまであ
 て赤の飯の沙汰もあく鶉の張籠も見えず神でもあい物神
 くくと利を付るのしかもことしの行童謠でこでもないも
 のでこくといふにひとしく何をもつて神とかいふや何と
 もつてでことといふや夢中でしらぬ俗物が初發の熱のう
 りことあるべし噫この夏いあればかゝる天疫の災を下
 して吏民あくるしみをかけたまふを願く天神地祇哀愍
 のまあじりをたれたまひまこと麻疹の神あらはすみやか
 になちくらが沖へ送りたまへさらばおのれも御幣を振立鐘
 と太鼓をうちあらしめておくれくどちからを合せ奉るべ
 し撫つさすりつ看病人の丹精を拙て告奉る微志とそれ見
 るあやし給へちゝんぶいぶい

○再編胡蝶物語序

曲亭馬琴

復讐の稗史手を盡してよりこゝみ八九年作者きのふのわ
きに倦て疑らねばいよゝゝ思接み能ずはかき所爲との
まりながら生活の二字に憑れて筆より外にとり得き男
子一疋に足らねども五尺の軀を安然と日ぐらし硯にむ
かひつゝ兼好らしくも思はるゝの見うけたふしの幸いな
らずやささ色ハ柴の戸を音づるゝ書買も今に寡からねハ堂
か間と長雪隠かい智蓋を絞り出して朧みあがら去年の暮
わつさりと氣をかへて胡蝶物語を著したるふ落が来たや
ら板元の貌さへいどい春めきて今茲も正月のはじめから
後編の催促の折々耳に入るものから一日版のあまけ日
和花曇より五月雨の降みふらすと武佐墨の曲々形にもこ

ちつけねハ盆前もはや遠からず時ねハ生ぬ頭本と爰に魁
て筆を起して再編四冊を綴りまし前後九卷の冊子とあし
つ信や河豚を嗜む者の美味を賞して中るを思はせ又稗説
を編ものい當るをおもふて苦心を厭はず河豚又中るハ蝶
ある故あり胡蝶のあたるハ板元の耳垂珠にあるあるべし
まからハ此書を胡蝶と命る河豚にあたるの縁しありとも
買ハ毒にも薬にもならず世の観官に居勝して板屋が削る
花堅魚も板木師が鐫る鯛の目も食ふが爲の新板三味下戸
あればこそ甘口お寐酒の猪口を左手に受て亦この編に自
序すといふ

蜀山人

○そり小木のことハ
もろこし杭州の人ハ日ごとよ三十丈の楯楯をくふといハ

りいとんや萬國の都よすぐれたる大江戸の百万戸二百六十餘の公侯八萬騎の士大夫二千餘町の市町寺社倡優の數をしらす一日は何萬丈のすり小木とくとんとかもふも例の江戸自慢にして豆腐を秤にすけてくふ祇園守の紋つけたる上方者などの駄味噌を上るとわらふあるべしすり小木もれん木も同じ山椒ころ伊勢すり鉢に備前摺鉢

○道中膝栗毛序

箱根八里の長持唄にの猛き宰領の心を和らげ竹に雀の馬士唄よの鬼殺を爛せしむはその歌の徳利酒呑や諸の旅衣都をさして行がけの駄賃帳を繰返し竿の建場よ雲起の息杖をしてゑいやらやつと書編たる東海道五十三次の記行に無滑稽と無言の二割増重荷に解言夷曲歌それが中よも

十返舎一九

唯一夜昨のめし盛押かけて商ふ懸の箱枕その有増を宿帳の帖とあしたるの空尻の竟無体あるはんの断の問屋場もときハハ頼まそくど此本の鹿島立お序する事さかり

○契情四十八手叙

山東京傳

千手觀音のさらなり薩摩守忠度い一本の手にさへ六彌太をとつて投のけたまへハ蚰も足が手あらバやみくと翠簾紙お包れて捨られいせまじと證き美童子も大江山の骨牌場で手のつかぬとを嘆しよし紙雛も寶の森お居おがら手の空しさを哀むも理ぞかしされバ傾城をころすも手おわらずして何ぞや故に今新手を盡して其題を四十八手とよふ是を以て則ち無手客の愚鹵に授よと我に與へしハ誰あるぞ何おもせよ此一冊の四十八手がッてんのかぬ

○花月春告鳥の序

為永春水

僕四十雀の不惑といふ歳あれと澤邊の意に異あらず野呂
里として家事に疎く職作を鴻雁の活業は風雅も洒落もあ
らざれど人情ものを巧婦それが鶴の愛鳩となりて果あき
鳴を喜鳥のかの明鳥を筆果報の始とし今猶書林へ鶴の橋
渡しどのありぬされば鶴の一より算へて千鳥の數に滿る
中本山鶏の尾のあがしく後とつぎて鳥の山と積み弱
翠の河より深き看容の御最負を空行雲雀の高く仰ぎ恵よ
供ふ一趣向を鶴うつらと翻案れど毎時初音の手がらひあ
く元來鶴の一聲に兼りをさます奇談も雉もしるし兼たる
短才の譬よいふある燕雀の鳴の覽をばつといへ拙著の
外題をも呼子鳥の得意もありとや水鶏もあらで庵の戸を

たしく知己さへ少からずいつも著述と鶴鶴あれと稻負鳥
いあみがたくて夜を以て日につく鶴のはやこしらへん鶴
の苦勞鶴の脾弱き作者の文盲そを都鳥の鶴たちへ鶴に穴
を見出して高く伺ふ鶴の目に笑われんこといおそるれど
世活かれバ驚きつよく鳩に三枝の禮もありまた愛敬も在
ますと小陵鳥を賞て日鶴をえらみ春告鳥と販元に贈り四
方にその音を傳へんと願ふのみ

○麥飯報條

風來山人

高からうよからう安からうわるからうどのやばの時代の
ふとへよて今どきの合點あされすひつぱりませで二の
膳にすわり安札で稜舗へ上る賣人のやすり買人のかそり
やすりかすりと云事をしらねバ今比の商賣のあらぬとさ

る御方の御説法聞とそのまゝ、早合點かしてまり子のどろ
、汗よりむぎめ一の思ひ付南鏡一片六進が三進二一天作
の御壹人前つもり上て見れば、サアやそい、伴頭殿のそ
るばんちがひかぬすゑ物かひけ物か但し又狐をつりひて
馬糞でも喰ひせぬかとはうたがひの御方もあらふがそこ
がかのやそりかそりでかひての仕合うりての悦すたつた所
が南鏡一片もうた所が五十か七十みぢんつもれば山を
さし頭巾と見せてやうかぶりいかは客も足かるゝと
は出被成てめしを出せコッヤ酒をだせヨウ不得意にあら
まやんせよ

○道外物語序

式亭三馬

佛語に拈華微笑とあれど華を拈つて莞爾と笑へば釋迦も迦

葉も鑿も妓夫も皆一般と思へども腹を抱て我から笑ふ
と襟られて笑ふとの笑ひ様に差別あり撒屁の音を聴つけ
し姉さんの忍笑ひの振袖の外にも漏らねど唐山の三笑ひ
日本にまで音響き今に傳へて聞及べり凡て笑も多かる中
おげらゝ、笑ふの馬鹿笑阿々ど笑ふの小説笑チホ、と笑
のお輕薄アハ、と笑が空笑かんらからどい勇者の笑かッ
らからどい軍書讀の笑あり其笑ととる者の戯場の打諢あ
りと思付たるのべ鏡出してうつした昔繪の好事家へのか
笑種その可笑とお臍をして轉回あさしむ嘗聞だんまり坊雄
子のけんけん鳴ばり父の長柄の長者が娘玉屋の花火を
好まれし幽王の奥様から笑て三百つりをとるべき苦虫の
先生も一たび此書を讀たまひと笑ひすといふとあし暗く

にさへ笑ひ、いゝかみ郭公先初春の笑初に山より先へ笑た
まへく

○客者評判記跋

式亭三馬

漢書に汝南の月旦評あり源語に雨夜の品定あり中上と評
したる唐山の時代狂言を上上と和げたる吾日本の世話狂
言の所謂俳優評判記の鼻祖にして笠翁卓吾兩季の搦梅よ
く咬わけた劇在行の西鶴團水に牽りて自笑其碩よ止たり
後年其笑瑞笑と云的其意を續で評しけるが今尙自笑の孫
に傳りり年々の評判ありされど伎藝の評のまにして拘欄
通と呼れし先哲いまだ看的の評論あるとを聞かず在下も
一の好劇的あれば一時劇場よ遊ぶの日意馬を戲門よ探さ
心猿を戯房よ放ち眼と東西の棧道に配り耳と兩側の棧欄

よと、いゝむきバ尖棚戲合せて兩面の照子に偈たり梨園の打
扮看的の介科形容お影踪の徒がふ如く睨めバ睨み泣けバ
愁ぶ生あり且あり淨あり涙子あり兩脚打諱老且劑小生よ
り小且まで皆ろれくの演劇ありて音楽曲の音おた而巳
これを正面より眺むとき看的人一同一に雜劇するに齊し
く劇子反て觀劇するに似たり素より脚色いえりどり見ど
り古實れ見功者最負連さどの子でんぼうのん太郎何でも
三十八文字屋江島屋風よ毫をとすらりと並べて見立た
小冊目けて客者評判記といふ因縁縁故そのたる後序爾
○道行風の妹背筋
戀すてふ我が名いまだき立出る襟の縫目やはだ着のうら
なれし故郷をふり捨て何國をわてとさだめあくかちて行

風來山人

身みの人のみか風かぜの身みにも戀こひのふち深ふかき妹い背せの二に正ただづれ生なま
ま付つたる躑か々のあし手てまどひのはかどらぬ大たい推お味あじ天あま柱はしらの
原はら風かぜ門かどが谷たにうちわたりいとかうくたるけんへきの織オリ々
たる峯かみをよそよ見て背せ筋すぢ海うみ道みちとぼくとおどり出るぞうさ
くし見み上あればはるかの峯かみお生なま茂しげる木き々の梢こぎや鳥とり羽は玉たまの夜よ
晝あわかね所ところにも頭あたまえらみひすむとかや世よ上うへの人のわる口くち
に花はな見み風かぜと浮う名な立た身みのたのしみもいつしかにきのふけ
ふの瀬せとかはるあすやさつてやもえ出るくさのにそよぐ
風かぜさへももしや知ち死し期きのつかひうと世よを忍しのぶ身みの一ひと筋すぢよ
千ち手ての御お手てあつくくと杖つゑとたのみし七しち九くの里さと四よくわくわ
んもんを打うち越こて鳥とりのそらねや帯おびの關せき十じゅう四し六りく初はつ戀こひに思おもひ
みだれし物もの心こころ血ち汐しほの酒さけのゑひまざれ縫ぬいめ糸いとのたまさか

よやころびそめしころび寐ねのそのむつ言ことにいひかひし取と
かはしたる誓ちか紙しのからすかあい男おとことだきしめてたどへ野の
の末すえ山やまのおく虎とらふす野の邊への足あしの毛けや爪つめの地ちどくへ落おると
もはあれのせぬといひしやんしたその言ことの葉はがしと付つて
わたしが背せの入いばくろ苦く勞らうする身みのうき旅たびもみんあわし
からふこのつた事ことこらへてやいのとよりうへバ男おとこもどもに打うち
まはれ親おやのゆるさぬ不ふ義ぎいたづら襟えりの住すま居いも叶かはねバか
く落おふれし二人ふたりが中なか心こころのやたけよはやれども走はらふおも
飛とぶにものみあらぬ身みのかあしさとをいふ涙なみだふくれける
がハア、まよふたり誤あやたり實じつ數かずあらぬ此こゝ身みにも先ま祖ぢいの聖せい
お王おう孫そんが傍はた若わか無な人ひとと名なを傳つたへ不ふ思し議ぎを殘のこす節ふし穴あなに恨うらむ
くひしためしもあり又また水みづ中なかあらかんで磁じ石いしにかゝるの

徳あれバもびにひねられ灰吹の底のもくづとしづむとも
尸よ譽有明のつきぬ妹背の旅づかれいざや急がん夜明
バ東しらとと人やとがめん兎あうくよ身の用心の屢眠や
雲のかけはし白たへの加賀越中の國境ふんどし谷のかた
ほとり肛門寺とて名にしおぬ大師の古跡ふし拜み蟻のと
わたり打過て金だの宿ふぞ三重着にけり

○鳥亭馬七袞壽詞

蜀山人

ことし桃栗三年柿八月をまたぞあやりのさつき十七日野
見てうなごんそみかねの矩とこぬぞ人間萬事塞翁が馬
老人人生七十古來まきある賀筵をひらくわれ四十年來の
知己なれば世の人のもてとやす七の字つくしでもかゝね
バならぬ所あれど八算でもいとむづかしき七の段何と

くべき質草もあゝつにある子が七ッいろは七言の柏梁の
詩あはじまり七文字のいつも八重垣のうたおこるそも
七十の賀のめでたき事七曜のかいやくととく七里が
浪の真砂のごとく春の七草のごとく秋の七くさのごとく
七里にぎひふ鯨のごとく七瀬の川のまさお至るがととく
七高山の壽かけす崩れず七百餘歳の慈童のごとく七あんな
のろゝの毛の長さがととしと天保のかいの九如をうたひ
太平樂の巻物をひらく七年の夜の雨る慈者甚孝記の歌吹
海をしのび基太平記の七ッ目に宮城野しのぶがひかしを
思ふ吉原年代記の板元の七もがりを悦び歌舞妓年代記に
わざをぎの七變化を尽すことお新作おとし咄の此道の開
山にして其門お入るもの七軒の茶屋お坐して七越のか

いらんをまつごとく新造りふるの諸門第七尺さつて師の影をふますもとより花の江戸ッ子あれバあまぬるき上方ものハ七里けんはいよせつけすあたりと去る事七多羅樹七衆七佛七觀音天神七代七の社七賢七叟七福神も照覽あれハ江戸七代談洲樓の壽ハ浦島が七世の孫彦やしや五十六億七千万歳彌勒の出る迄生つゞけ嗚呼つがもかい長生を力車に七くるまつひとものつさし烏焉馬のとし

○浮世風呂大意

式亭三馬

熟監るに錢湯やど捷徑の教諭なるハ一其故如何となれば賢愚邪正貧富貴賤湯を浴んじて裸形ハなるハ天地自然の道理釋迦も孔子も於三も權助も産れたまハの容にて惜い欲いも西の海さらりと無欲の形あり欲垢と梵腦と洗清

めて淨湯を浴れバ旦那さまも折助孰が孰やら一般裸体是乃ち生れた時の産湯から死な時の葬儀にて暮ハ紅顔の醉客も朝湯の醒的とあるが如く生死一重が嗚呼まハあらぬ哉されバ佛嫌の老人も風呂へ入れバ吾しらす念佛をまうし色好の壯夫も裸にかれバ前をおさへて己から恥を知り猛き武士の頸から湯をかけられても人込と堪忍をまもり目お見ぬ鬼神を隻腕に彫たる俠容も御免あさいと石榴口ハ屈むハ錢湯の徳あらずや心ある人に私あれども心あき湯に私あし壁へハ人密に湯の中にて撒屁とすれば湯ハぶくくと鳴て忽ち泡を浮み出す嘗聞敷の中の矢二郎ハしらす湯の中の人として湯のおもはくをも耻ざらめや總て錢湯に五常の道あり湯を以て身を温洗垢を落し病を

治し草臥を休むるたぐひ則仁あり桶のお明のござりませぬかと他の桶に手をかけず留桶を我儘につかはす又の急で明て貸たぐひ則義也田舎者でござる冷物でござい御免なさいといひ或の早いか先へと演べ或の静にお寛りあどいふたぐひ則禮あり練洗粉輕石絲瓜皮にて垢を落し石子で毛を切るたぐひ則智ありあついといへば水をうめぬるいといへば湯をうめるお互に背後をかがしあふたぐひ則信ありかゝるめでたき錢湯あれば此又浴する人くも水舟の升陸湯の桶方圓の器に随ふ道理と悟りて湯屋の流し板の如く巳が心を常に磨きて諸の垢をたける人間一生五十年二度入の御方あるとも御一人前の分別あるの湯屋の張札の如く一心足らぬ萬能齊あり馬鹿も附る藥のあ

らずも走馬の千里膏鞭打て呉れる交の無二膏あり口中散を蹴せば忠孝一切の妙藥二親の安神散鬼角梵惱の火の用心の湯屋の定書お似たり心又驕奢の風立バ家私の何時にても早仕舞あり五倫五体の天地より預物あれば大切の品を御持參物あるを色と酒とに魂の失物不存我から招く禍の他人の一切存不申事ならずや名聞利欲の喧嘩口論喜怒哀樂の高聲御無用此文言をまもらぬ時の仕舞湯に入損ひモウ抜ましたといはれて後悔手巾を咬とも益あしあべて世の中の人心の錢湯の風に等く善悪よ移り易き物あれば權兵衛が袷襦から八兵衛が羽二重に移り田婢の湯具から令室の絹布へ移るきのふの編絆一枚の疊の上へ脱しもけふの重着の棚の上へ脱に等しく高貴貧賤の天にあり善悪

邪正の己が招く所あり此意味をとくと悟らば他の異見の
朝湯の如く己が身に染みわさるへし唯一生の心の塵を借
切の戸棚へ納め魂に錠をおろして六情を履違へぬやす
堅く相守可申事と神儒佛の組合行事が牡丹餅やどの判を
居てしあふ

○青樓晝夜の世界錦裏序

山東京傳

一日書肆馬唐丸来て曰く例の小冊の按じのありやなしや
と手答て曰くまだあるくと素癡も道念みる様に安請合
にうけがひてト執筆た處が無の金のよい思案あ
り蓋安作の茶表紙も年々歳々穴相似て歳々趣向新し
からされバ一つづつと捨てみた青樓の晝夜の世界夜の景
色の花美とゆうつて變た按じの小冊此奴の一ツ新編あら

めと其儘錦の裏と題す而已

○太平樂巻物序

風來山人

やまと歌のたけき心をも和らげ鬼神をも感せしむ男女の
中をも和らぐるの歌ありされバ積身揮もていらとんへバ
歌にもよまれ下紐といへバ雲の上人の口号ともありなん
かしのもの言様言品みて仇し仇浪寄てハ返る波淺妻船の
淺ましやといへバさも麗しく聞ゆとあん取もあをささ今
の世お船饅頭もて囃す此道の蒼妓肥滿くの阿千代て
ふもの新飛てふ白拍子にまみへて生活の不祥を説破り浮
世の十和が替玉とありて女閨の寓居お目下見し雨瓦三舎
の荒唐と口かたましくも言たるを慎燕の奴が供待の聲高
に語りしを予物蔭より立聞しが言葉のありひくしとい

へども見識の水道尻の火の見より高く彼泥郎が得難よ
たる跖婦傳の趣にもおさく劣るまじと筆おまかせてか
いつけ太平樂卷物と号す希の四方の君子鼻の孔の行届さ
る所の瘡深い奴が脱漏たる事も多からんと万事茶よして
見たまへりしと云爾

○書畫帖序

蜀山人

口より出るを詩歌といひ尻より出るをおならといふた
おならのさくさきにあらす詩歌にもまたわるくさきあり
唐一代を四ッ割にして初盛中晩の階子尻といひしも盛唐
くさきの偽唐くさいのとアウくをひりちらして今の放
翁齋のそかし尻とこく世とのありぬやまどすたの馬鹿律
義にしてあらのとのおならの外に草庵集や新題林をにぎ

り尻のおざりつめておもしろくはおかしくは尻玉のやう
おは放尻をいたくもおかしこゝお狂歌こそおかしきも
のされ師傳もあく秘説もあし和歌より出て和歌よりお
しく筆より出し青紙筆その裏よもとびこりて性いせん
より瓢箪の丸のの字をかくばかり二百五十の同庵がや
きもちをやく事とのありぬいらざる老のにくまれ口こゝ
らで筆をとめさのか何り自讃くさいのくさいもの身まら
すどでもおんどでもいひあさへ

○麻疹言跋

式亭三馬

北川氏船にて契約の事と書たる招状の荒と姥の話説に
りて二十八年のむかしに應れどもかせての後我が
身お合ふ麥殿の歌の徳の今茲も麻疹の流行に後れず

れバ麻疹の養生も初發の熱の瘡言ハ醒ての後のは了
簡と寺岡もうけ合ふべけと治疹ての后の不了簡ハ了竹
がしる處にあらす身體髪膚を筈に換るハ口ハ孝行をつく
じて親ハ不孝あるをしらす長生不老を經に縮るハ口ハ初
物を食つて生延る味ひをしらす也鰻の樺燒三申ハ四く
しふくしと思ハぬ己が身を捨賣にして裸百貫丈夫につか
つて五十年人間わづか二百孔の價ハ御堂人前の命をあや
まつハ歎ハしき事あらずや予頃日麻疹に罹りて養生と休
るの間箇の劇文を著して題するハ來舶の書名を借り花陣
綺言の響きと探つて麻疹戲言と題號しこれを弘るハ彼林
と鈴の如くあさんとすまかハあれと呪術の猴の人眞似に
して多羅葉のたらのぬがちあれハ世間の善妙にハ引かへ

て惡評をするものあるべしさらば噴嚏をするのみにて人
の噂も禁物も七十五日のすゑを待つと云爾

○藏子名所圖會序

曲亭馬琴

大極靜てよりこのかた天に三光の觀相あり地に三形の絶
景多し遠き漢土ハ更もいはす須磨明石の月影ハ引窓よ
り觀るハ難く吉野龍田の花紅葉ハ鉢植にするハ由あし口
に一杯の麥飯を喰ハ足に三合の肉刺を踏出し辛うじて山
川に遊ぶといふとも嗚呼それ何の益かあらん近く是を求
れば顔に眼鼻の名所あり脊ハ七九の灸跡あり關の名所の
庖丁家ハ稱せられ菌の名所の葛西に高し歌人の居あがら
名所を知り偏目の居あがら眼醫者を知る巨燧辨慶門の犬
尾をふりわけの雙六ならで京へだま上らざるハ瘡癩ハ劣

るの譏ありとも居然としぐ八方を辨じ安然として四海
よ遊ぶもの皆書畫の功ありてを以て近ぶる世に行はる
都名所圖會お倣ふて戯子名所圖會三本を作る所謂盲目
の撈書といへども蛇に怖ざる田夫山妻はじめお此書を熟
覽してまかして後戯場に遊ば彼一番叟より見ざるの悔
あからんものかよつて繪の事の素人落を後にせざる歌川
豊國が筆を借て賣物に花を飾りまかも招牌に偽りあき鶴
屋が本慶の正戲廂に投じて一番景氣を見る事にあん
○はこいり嗽石香口上代作 風來山人
トウザイ抑私住所の儀八方ハッ棟作り四方に四面の藏
を建んと存立たる甲斐もあく段くの不仕合商の損相つ
いき澁團扇にあふぎたくられ跡へも先へも参りがたし然

所去は方より何ぞ元手のいらぬ商賣おもひ付いやうにと
引立被下ははみがさの儀今時の皆様の能存の上るれ
はうくすの野夫の至あり其穴を委く尋奉れば防州砂まに
はひを入人くのおもひ付にて名を替るばかりにて元來
下直の品にて傍坐いへども畢竟袋を拵の板行をすりい
のあのいものゝみて手間代お引けい依之此度箱入よ仕世
上の袋入の目方二十袋分一箱に入御つかひ勝手よろしく
袋が落ちり揚枝がよとれるとやうなへちま事無之
様仕かさでせしめる積にて少ばかり利を取下直に差上や
い尤藥方の儀私文盲息才あてあんおも不存いへども是
も去渉方よりは差圖よて第一に齒をしるくし口中をさ
やかにしゆしき臭とさり熱をさまし其外しゆくさつた

富士の山ほど功能有之由の薬方は傳へ被下し應かきりぬ
かのほど私に夢中にて其外の功なりさかすとも害にもあ
らずまた傳へられた其人も丸で馬鹿でもなくいへばよも
や悪しくいあるまいと存敵の通薬種をゑらるゑ随分念入
合仕ありやうの錢がほしさのまゝ早々賣出す御つかひ
被遊ひて萬一不宣いのだいあし御打やり被遊ひても高
のしれたる汚損私方の塵つもつて山とやらよて大に爲
相成ひ一度切にて御求不被下しても御恨可上様の無御
慮い若又御意あ入スハ能いと評判被遊被下いへば皆様
御最負御取立にて段々繁昌仕表店罷出金看板を輝かせ今
の難儀を昔語と御引立のほど隅からすみまでつらりと
奉希上し其爲の御断左様にシヘナクくくく

○雙蝶記序

山東京傳

此物語稿をりて人あ叙を乞んと思へどもかゝる拙作あ
れバ讀てくれる人も有まじと頼まぬ前より先づりをして
自ら緒を解んと思ふにこそを漢文に述べ之乎者也の置
所酢の蒟蒻のど面倒あり書得た所が餅屋の餅よあらず素
人こしらへの柏餅皮が厚くて味ひあしと云むこれを和文
に記さんとするにしの字一ツを論ずるにさへ過去未來現在
などと三世因果の業をさらし謠の文を淨瑠璃節に語るや
うよてかたいら痛き事多しと僕が不文を譏からん蟹の甲
よ似て穴うるさき世間具やと思ふにつれ具といふ字を縁
にして此草紙の婿を尋る嫁あ假令て見るに給ひ則ち顔交
かり作の則意氣あり板木彫の紅白粉あり摺仕立の嫁入衣

裳あり板元の親里あり譲で下さるは方機の新君あり貸本
 屋様のにお媒人ありさて顔形にたとふる繪の歌川登國の筆
 あれバヤし分あし板木彫の小刀にて紅白粉の化粧もよく
 摺仕立の嫁入り衣裳も不足なく板本の親里もよくをのあれ
 て随分安賣の嫁あれと肝要の意氣あふとふる作が愚ふて
 えかも田舎言の其うちよ都言を横匠ふ言ませて聞ぐるし
 きと多けれバ譲で下さる婚君のお氣にいらぬがらあるべ
 し所を貸本屋様方のお媒人口ふてかやうくの娘がござ
 る顔容の云分なし必ばへの少し愚か生なれど其かひりに
 の舅姑の言を背す婿君を大事にして律義一べん所帯形氣
 の娘でござる先見合をして見たまへと抽を覆ひあしきと
 好む執あして勤めこんで下さらバ縁とはさ此娘もよき婿

君よありつくべし野猪も伏猪といへバ優く馬鹿も結構人
 どいへバ聞かがよし是則ち力と頼み奉るお媒人の貸本屋
 様の言あしに依る所あり然則の板元の親里が喜び多く祝
 儀の小謠千秋萬歳の千箱の玉をまたへたて追摺の御注文
 冊々の聲を樂ひ至るべしかく思ふ所をありのまゝに記
 して以て是を序とし物前に残り本のかへると云の忌詞大
 福帳をおたでたう開きますといふ

○風流庵報條代作

式亭三馬

大隠の市にあり大愁の僻地にありて幾何の隠居某の隠居
 と近來隠居と世に出てはやる事夥し木にも草にも隠居の
 名ありて各好事家の寵を得たり田園の開を賣り林泉の景
 をあさきひ我うら観物場とする氣あるけれと人の訪來る

に隨ひ風雅でもなく洒落でもあしせう事あしお惑はる習俗一世一度の名残狂言再び舞臺を踏にひとしく竟に隠居も二度の勤をあしぬ抑こまの金馬門と伯仲の際から金龍山の隠家に住先の隠居にいかくれあき何がしの別荘あり春の櫻ふ秋の萩四季の眺めと庭あつめて居ながら拜む観音の裏の田圃の眺望して一目にかすむ千束の郷うそを筑波の山ころ見へね伸上りなび吉原の尊女そこらに手にとるごとしされバ雅どあく俗どなく物數奇したる庭を見んとて来つとふ人ひきもさらず頃日あるこの需めに應じて此邸宅を號るよ樓臺館閣もとよりあたらす社居洞窟のかたくるし寮坊觀室の坊主くまなく軒亭齋園ありふれたり盧と舎の夏の外套めけバ庵としべいか堂せうのとひとつ

拾つて監みるに伊勢の産の伊勢屋と言越後の人の越後屋とよぶ是をおもへバ穿つに及ばず風流こゝに止まる故風流巷と號たり後園よの茶室の數々今日庵を始として庭と稱し窓と唱へて敷の内あ至る迄かしこゝにあまたあり侘たる茶の湯を遊び寂たる閑栖を愛し玉の日に究め月に定先所ふよりて貸まらす月雪花をあがむるも腹さそしくての面白からす何か趣向のあるべき事を思ひよりたる手打そバ味ひの精に製して器の清きを撰みたり蕎麥を好ませ玉のぬ方ふの門前へ人を走らせて名酒料理の酒池肉林菜飯お田樂うなぎの蒲焼喫茶一服亦一椀一盃々々三杯さげん下戸と上戸のは隨意も何でも彼でも取ませ奉れば茶湯を茶漬も換るとも厭はぬ處の風流庵彼の大隠

の在といふ市の街の經道ある僻地に欲ばる此庵主を花に
の花の隠居とよび月にの月の隠居と稱すすべて四時の遊
觀に隨ひ何の隠居と片よらず廣さの庭の風流庵と只にぎ
のしう駕を賜はらば庵主の幸ひ甚しからんといふ

○神靈矢口渡政

風來山人

樽ぬき澁柿を笑て曰汝我身の澁さを取す澁柿答て曰汝も
澁を抜すんバ澁く我も澁をぬかバ甘からんと善惡の本不
二あり一日吉田冠子來りて淨瑠璃の作と請ことしきりあ
りされバ盲の蛇も畏せ小戸のぼた餅お遊すと不稽無上の
筆任せ只初段の切三段目の口のみ予が筆にあらせ其餘の
間雲も綴合せとも今をのじめの作者の巢立しかも初日の
急されバ引書を閱に違わらせ校合も足されバ其誤多から

ん澁のぬけざる澁柿の澁さ所の容したまへ寅の初春中旬
作者の甲析福内鬼外まじめあ成て誌す

○飲酒法令

蜀山人

酒ののびべしさけののびべからず
一節供祝儀にののび
一珍客あれバののび
一肴あれバののび
一月雪花の興あれバののび
一二日酔の醒を解よのひどりののび
この外群飲佚遊長夜の宴終日の飲を禁せ童語おいのくお
まへその様に酒のんで狸やよあらんす下心狸やよくのめ
とも禽獸をのあれず人としく禽にだも鹿猿べけんや

○傾城鵲

山東京傳

五戀の突出しより名残のうらの季明まで百員が百人あが
 ら買色の手柄おあじからす裏移りの床花よ月を結びし初
 章にの打越しのさしをもつかせ戀連れて馴染の甘味の先
 達の發句を待たず脇起りの口舌にの屏風のうちの十五點
 うき扱の妙句にてのかり合の手をとりての判者も増點を
 加ふべし揚句の終にの雨に風よりかかれ通も此道ふ遊ふ人
 觀念の第三にして玄妙切の妙あるの他の了簡又及ふべか
 らす表八句あ紫竹の川竹堤八町に口八調をくらべ月花の
 坐お中坐をゑらび手が拙あき筆句をもて小菊の折端に評
 記し彼の俳諧鵲に比して傾城鵲と題す鵲の買の横訛あし
 て女郎買といふにひとし蓋似た山半歌仙の入句を惹ひ色

をも香ども知る人にまかせ

○心猿辨

曲亭馬琴

心の猿の小天地の間に孕れて十月にして生る獸猿のしか
 らす其色赤くして火に類し其形圓して下尖をり肺肝をも
 て佐とし脾腎をもて臣とし臆胃膀胱包絡をもて家とす或
 の善にして悪に馴易く或の悪にして善に馴易く喜怒哀懼愛
 惡欲の七情みあ此ものに奮發せられ春の花の下に歌ひ秋
 の月の前の嘯き夏の樹の蔭に睡り冬の雪の窓に吟じ硯に
 向へん物書れ鏡お對へん鏡つくる色に溺れて城の傾くを
 しらざるとき浄藏も治し難しとす酒を吸ふとき蛇のど
 とくにて座の長らん事をあもひ献とき蜂に似て味ひ密
 ありといふゆり衣のいろよさを羨み食の美味を貪り錢あ

るときは人を見つると塵芥のごとく錢竭て人お媚るときは瘦
狗に等し下聞を恥ていよく學ばず上智を誂てますく
愚かり道を聞バ必ず笑ひ諫るときは讒ると思へりこの故
お使ひ難して悦し易く馴易くして親と難し財の爲は蓋を
忘れ怒り乗して死をたも辞せず勇さと谷を出る虎に似た
るも勢竭ての家を喪ふ猫に類す利お走るときは捷徑よりし
て讒を思ひす慾は迷ふとき正路を枉て誑を事とし浮ゆる
雲の富と羨ての枝に尻かけて沈吟し流るゝ氷の月を把ら
んとしての深き淵は臨て危をしらず朝四暮三は謀られあ
がら五十歩をもて百歩を笑ひ養由基が弦音を聞てはじめ
て宇宙に敵あるをしる冠して楚人と陋められ箭を抜て魏
將歎く臂の長し李廣が弓衣の黒し張史が宅周穆南征して

君子化し越女劍を試て袁翁走る元忠お給事して主人に怪
られず昭宗に寵せられ羅隱詩を題す三輪山お晝寝して臂
を執られて歌ひ阜嶺河に群遊て形を隠して嚙く美作の國
より参りて鎌倉將軍のほ所に舞踏り正源寺の鐘を鳴らし
て官軍九院の衆徒を催促す麻呂と呼ばれて歌人めかしまし
と云ときいらの字を略せりかのみこ。いろのたちばあ。こか
のみあ。木實鳥といのみこ。たもとまひあんと異名多かりま
た唐山にの野實。山公。巴西侯。白袁公。石媚乳。林泉處士。閑雲處
士。あんどくさ。に呼びあへたりこれら山林をもて家
とし或の人も養れて猿女の神の迹を追ひ猿樂の名さへ起
したまとも絶て怕るべきものよあらず只怕るべき心の
猿のみさればよや昔聖人仁義禮智忠信孝悌の八陣を布て

これを狩らへ金仙又地獄餓鬼畜生修羅の四趣を説てこ
れを懲らし神明亦眼耳鼻舌身意の六根を示しく彼れお不
淨を想ふとを許さず悲しい哉人家山林の猿のみを識て己
が心の猿を去らず巴峽に月落て三聲鷹を断と云も悲猿旅
客に心あく心猿相感じて爲に衣襟をうるはすのみ猿よく
われを賤して歎しわれに逼て哀しわれを激して憤を發さ
しわれを慰めて樂しませずはじめわれわが心の猿の在と
ころをしらせ彼が爲に捺役せらるゝ事四十二年やうやく
あして半拉ぐとを得たりこゝをもて色に溺れず財を迷す
歡ぶべきも歡はず哀むべきも哀まず竊は世塵を厭ふと雖
も彼いまだよくも悟らず徒ら意思を費して著述に耽らし
鬪すれば無用の辨を争し事を悞るの識と腹を物あらでも

しれるが如くあめげあるの昔是彼が所爲ありけり夫錦心
繡口の才人すら千季句を煉て僅か佳對を得たりとあんに
ゝる故も文人多くの子あし思慮の命を傷ると酒色より甚
しといふある相如が絃断て白頭の吟空しく典嗣が髮枯れ
て千字文成るいよしへの俊才嗜慾の爲に身の衰を忘れし
ま似たれども坐し虚名を高くして兒女を悦ばする類にあ
らず文章一家をあして後世の師たり先哲に耻て後生を懼
れわきわがきのふの非をしるとさひ面愈く報ありて更
にする所なし限ある才をもて限あき書を著し命を筆のこ
とくせんといふ愚あるわさあるべし月日の逝と速にして
墨と共に摺減し一旦硯の水竭は悔とも争及ぶべきとわか
りにしてけふも暮しづ猿猴の小鼠に伏し心の猿の名利に

役せらるる閑に背を懸して虱と捫んとすれども得せず嘆息
してみづから記し自ら注しもて己が誠とすと云

○猿寺禪師七十賀詞

蜀山人

人生七十古來稀なりといひし詩人も五十九歳で食傷して
うせ七十從心所欲とのたまふ聖人もたつた三年矩をこえ
ず八十年胎内よゐられた老子のお袋も迷惑あるべくたし
か七十九とやらで跋提河の泡ときえし佛の常在靈鷲山と
てぬつまでもまた息災とさくも片便にて心もとあしこゝ
にさる寺の大和尚の七十の壽の文をつくれとさる人のも
とめいゑまがたく千年の鶴萬年の龜松竹のときいもふる
めかしられはかの佛説の那由佗阿僧祇五百塵點劫四十六
億七千萬載彌勒佛のせり出しにさし出しの蠟燭てらく

どはあのみさきへ出るまでの高野六十四年の少年蜀山人の
請合あるへし文化九のどいみづのえさるの尻も大晦日に
ちかき比しるす

○放屁論自序

風來山人

屁てふものゝある故よへの字も何とやらをうしけれど天
に霹靂あり神又幣帛あり鷹に經緒有船又艦あり草も女青
ゆり虫に氣鬚あり狐鼠の最後屁の一生懸命の歎を防ぐ
人として放すんば獸みだも如ざるべけんや放たり嗅たり
屁たる君子ありといへば強これを賤しむべからす今評判
の撒竅漢論より證據兩國橋

○通言總離序

山東京傳

我嘗ていへることあり青樓の我爲の雪隠ありと夫如何ある

れバ持たが病の腹痛み惱み金尿を放らんが爲尻をほつ立
て此廓に通と繁さが故あり若貧客我尿を喰いし藝ち黄金
の蟻岷とあらん一日例の長尿に退屈の餘り此妄作ををし
て硬尿の堅をしてびり尿のするきに和げ世に其尿の撒様
を傳ふ通客といふとも我勝を覗すして何ぞ尻の穴の廣と
をしらん吁尿が憫あ非すや

○十八羅漢圖讚序

蜀山人

大明の所帯崩し粟連の和尚たち十八羅漢の圖を書きてそ
の次の羅漢くふ願の舞の偈頌ありそも讚だやら何だや
ら面白くもあんともし片手にあらずてうちくあな
き笛のあひくまづ一棒をふりあげてつふりてんく天
竺の子ども遊びの游戲三昧ちど流行にのほくれたれと放

下師の小刀のみ込すかたの聲聞根性あき二九の羅漢やく

○雑談紙屑籠序

十返舎一九

田舎の出合馬の沓を膝に履されバ摺こすの愁あり飯盛
の年明玉の馬に乗されれば本の土はせりあ歸るの悲みあり
遠國邊鄙の人といへども苦の世界の遁れず都會の人の猶
更の事あして兎角命の洗濯せんあ少しといへバ稍し盛
旅籠屋の飯を喰ひ蒲團きて寐又はたらく雲助あまぢる
旅中のたのしみにしることなしこゝに雲水といふ風來人
普く諸國を腰掛あして至らぬと云所なく道路に見聞の珍
しきことゆやしき事又耳を取て鼻かみし事かの雲水の書
集し反故の中より誠らききとい省きて啞ばつかりを紙屑
籠と號侍りぬ

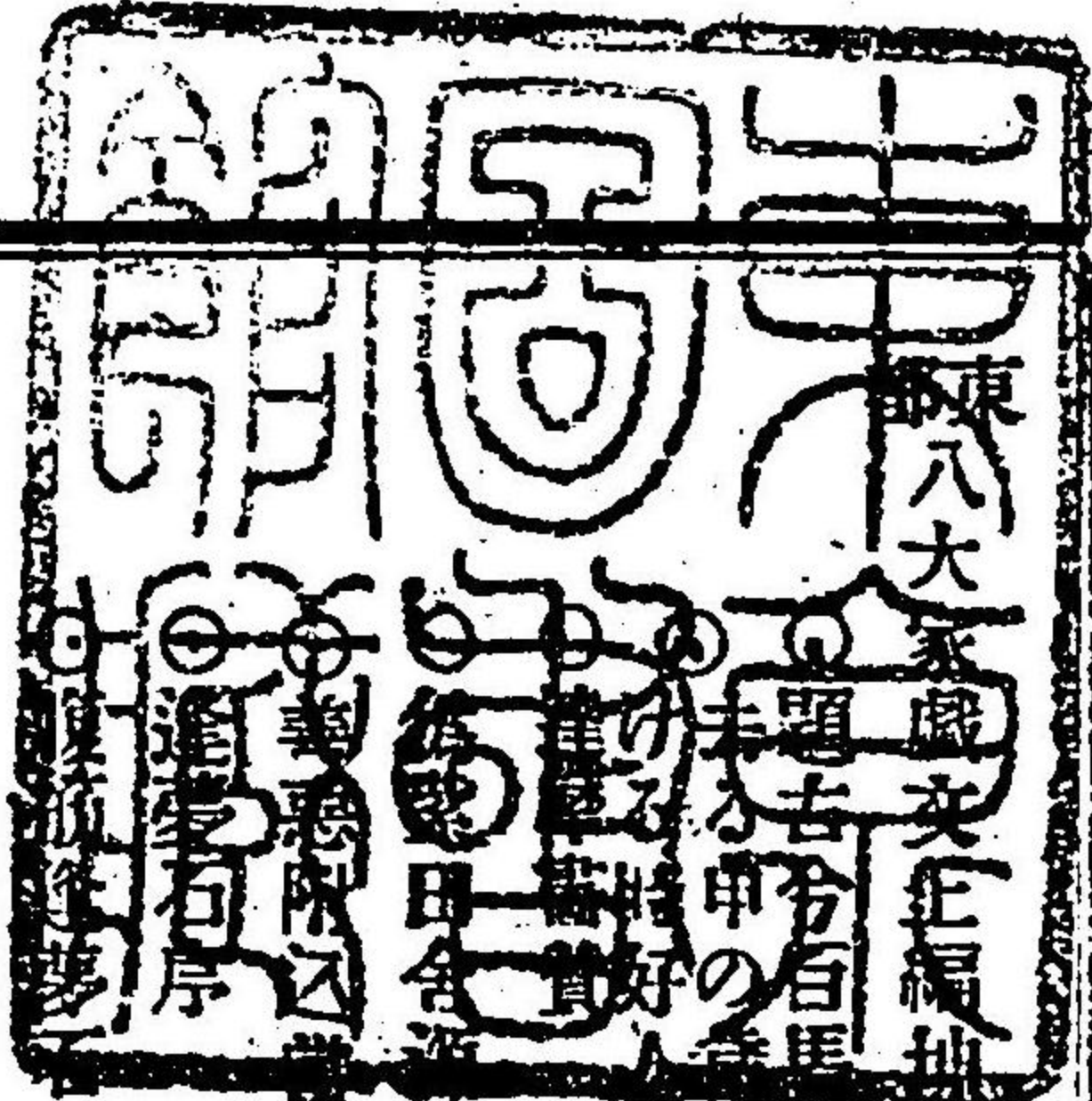
○坐敷藝忠臣藏序

山東京傳

寒中の鮫鯨吹雪の中の河豚汁とひきでんの事と稱美せし
 冬籠又戯作の新版はらんふいれんと金屏の松の古枝をき
 つて圍爐裏にくべちいで見やばらんつれてと麥つき
 歌の麥茶をすゝり安行燈のあかりをてらして此長の夜を
 まちくと起て居ても何の眼鏡や鼻ほど夜目がさかね
 バ自笑もおほろおもひついたる語本あるれど八文字屋のう
 バへもゆかす一文宇屋の智恵もでねバこつての思案にほ
 たのすと烟草でうか／＼考ても獅子銚石烟管の火皿とけ
 るバうりで趣向のうかますほどんと案じに月の入山まき
 よりの一里半息をきつたる力爾のとく文箱もたせて版元
 の催促の毎日ありどふで虚から出た賢であければ根のと

げまいと明日あさつてといひのべる一寸のがれの万八を
 聞や伊賀屋氣の長い版元も勘右衛門袋の緒がされて自身
 お馬を乗出し節季師走の賣物の一日ちがへ入れこづち
 がふと理屈の詞うべあるかるだん／＼あやまり入ました
 と地口でもあく作でもあくまやうとあしお書綴種本られ
 へおわたしやす自身又氣をつけ校合はれとあげやれば版
 元のにこ／＼しがつてんがてん全部上木するまでの衣魚
 にも喰さぬ此種本と懐にし／＼販りけりかゝる手詰の作あ
 れバはめんいへたのい／＼

東都八大家戯文上編卷乾終



東八大家戯文上編目録

- 鹿卷首
- 菅原楠といへる工出し世に行はれ
- より狂歌を給ひしらの返歌並に序
- 氏初編序
- 座帳序
- 二編自序
- 腹筋逢夢石三編序
- 廓節要序
- 雑談紙屑籠序
- 火をいましむる詞
- 荒御靈新田神徳後序
- 娼妓絹籠序
- 千秋井の記
- 里のをたまたみ評自序

一 式亭三馬
 二 風來山人
 三 蜀山人
 四 柳亭種彦
 五 三十返舎一九
 六 山東京傳
 七 山東京傳
 八 式亭三馬
 九 十返舎一九
 十 蜀山人
 十一 風來山人
 十二 山東京傳
 十三 蜀山人
 十四 風來山人

○奉加帳序 翁名燕斜又号豆三

○燕斜翁をいためる詞

○藤栗毛發端序

○偽紫田舎源氏第十編序

○癩疹與海鹿之辨

○月雪花

○長巳婦言序

○矢口荒御靈新田神徳口上 代作

○後日荒御靈新田神徳口上 代作

○風餅酒論 清水餅口上書第二番

○菓がものさく

○劇場林言葉の外序

○酒色財

○さよとづ餅口上 代作

○傾城水滸傳二編序

○嫩葉葉相生源氏後序

○平荷集序

○荒御靈新田神徳口上後日 代作

蜀山人

蜀山人

十返舎一九

柳亭種彦

式亭三馬

式亭三馬

風來山人

風來山人

蜀山人

蜀山人

式亭三馬

風來山人

風來山人

曲亭馬琴

風來山人

蜀山人

風來山人

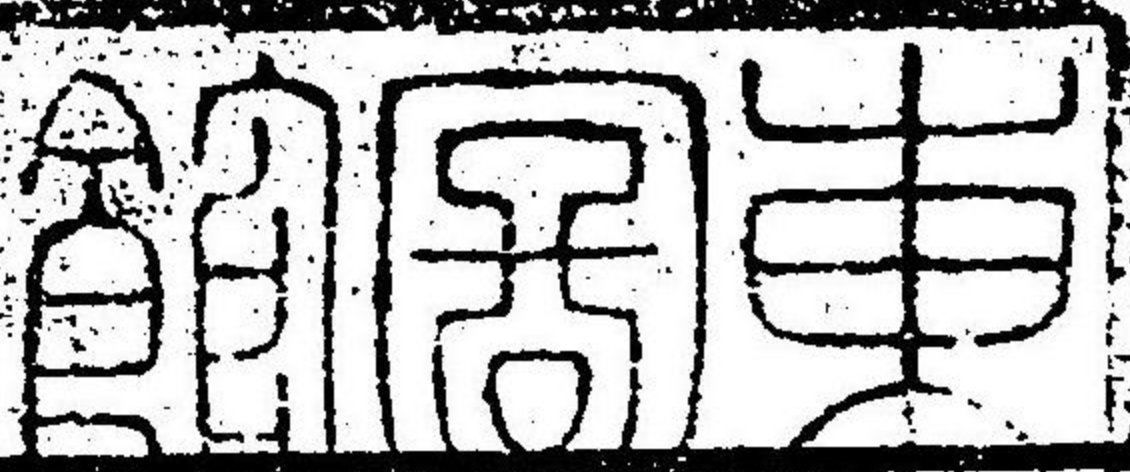
東都八大家戯文上編

○題古今百馬鹿卷首

春風居士選

式亭三馬

夫馬鹿の名目一から朝鮮紅毛のいざまらず愚癡無智あ
 と、卑たるの天竺流の釋迦の經論頑愚蒙昧魯鈍愚は
 ののく阿房の漢名として癡呆白癡とこうべるの唐山の俗
 語を暗にたる小説家の切抜あり和訓に「おろか」と譯してよ
 け以降馬鹿に附る藥のあけれど安本丹の親玉あり雲通玖
 猿松のうさくれ猿松のつそり空氣の類の悉く古調よて
 間拔鈍癡氣申はね者の近体の稱号あるべし余程置て来た
 貨物の近遠さ言ありしを大呂四郎金什禁太老と速く通
 したるの捷徑長を呼ぶ面長とし短を呼ぶに不足とす。た



わけを糞み穢を想の腑脱に玉の賞あるの如何抑べらば
 うの好観物から牽りのろまの可咲演劇より發る斯一
 お癡呆を擧て悉く馬鹿を盡さば所謂百の口些し不足歟空
 索子歟伸た鼻毛のかぞへも竭す結構人も癡律義も到頭バ
 全じへげたれあり哥哥の伯父の上に立ん事難く腎六の服
 作が下み立ん事難くあんぢりけるこゝに馬鹿の馬字を名
 のりて三馬といへる癡漢あり自己が白たるをバ棚へ放下
 して世人の暗穴を採し目て古今百馬鹿といふ看官これを
 閱するとも人を馬鹿にしたといふとをかを素より承知の
 文盲短才寔又華押のゐが人眞倍三本足らぬ戯作者がお利
 口らしさを願れば吾あがら吓馬鹿らしうさんす云爾
 ○去る申の歳菅原櫛といへるを工出し世も行とれける

時好人より狂歌を給ひしその返歌並お序

風來山人

用ゐれぬ鼠の子も上尖竿をかほえ用ゐざとバ虎皮輝も地
 獄の古着店に釣さるといどつと昔の唐人の癡語眞實て呵
 らるゝより坐ありに擧らるゝが快の人情あれば虚言と追
 從輕薄をいねねバ人當世を去らぬといふ抑此當世といふ
 もの今ばかり有にあらす祝鮫が倭有て宋朝が美わらずん
 バ難乎今の世に免れんとあれバ昔より有來の當世おして
 八百歳が助六の柏筵が助六あれども人今更の様に心得る
 も片腹いたし我も此當世を去らざるにのわらぬども万人
 の盲より一人有眼の人を思ふて假にも追從輕薄をいりざ
 れバ時にあぬぬ持前ありされども人と生し冥加の爲國

東八木...

恩を報せん事を思ふて心を盡せば世人稱して山師といぬ
予戲て曰智恵ある者を識に馬鹿といひたけと呼あは
うといひべら坊といへども智恵ある者智恵あるものを識
に其詞を用るとわたらず只山師くと識るより外あし又
造化の理をえらんが爲産物に心を盡せば人我を本草者と
号草澤醫人の下細工人の様ふ心得己に賢るのむだ書に孕
瑠璃や小説が當れば近松門左衛門自笑其積が類と心得火
洗布ゑれさてるの奇物を工めば竹田近江や藤助と十把一
からげの思ひをあして變化龍の如き事をしらす我の只及
すあがら日本の益をあさん事と思ふのみ或ハ適大諸侯の
爲に謀りし事とも國家の大益あさあしもあらざれども狡
兔死して良狗烹られ高鳥盡て良弓藏る細工貧乏人寶鳴呼

薄いかな我耳垂珠と悟を開き露命をつあぐ營に當時賤し
き内職よて其糟をくらひ其錢をせしめんと思ひ付しを早
くも卯雲木室君に尻尾を見出されおくり給はる狂歌お
酔て来て小間物見せのおて際ハ
仕出しの櫛もはやる筈あり
實や己をしらざるに屈して己を知るに伸とあんいへバ此
御答申さんとしてわがまハ八百を書ちらす固己を知らざる
人に見せるおのあらず嵐音八が曰ア、氣が違ふたさうな
かゝる時何と千里のこまものや
伯樂もあし小つかひもなし
蜀山人
○達摩畫賛
南天竺の菩提達摩はるく西より來りて梁の武帝にま

みえし時民の膏血を去ぼりて堂塔伽藍をつくるをみて無
功徳とこたへつひふ少林のもとまかくれて面壁九年教外
別傳不立文字といへど一切經の板行もこの門流の末よ
かりておがみづきのめしくふぼんさんもこの薬板のわう
げよよりて大般若の轉讀も出来五七言の偈でも作るのま
だく此輩あるべしいたづらに雪まろけの作りものとか
りて子共の杖よ穴をあけられ疱瘡見舞の不倒翁かさやが
れ小法師とあたまをはらるゝも又白眼のいたりあらずや
○偽紫田舎源氏初編序
大江戸の真中日本橋お近き式部小路といふ所にいと媚さ
たる女あり其名をお藤とあんいへりける初元結のそれあ
らで紫の鬘紐をつねにむまびけれの人々お藤といよば

柳亭種彦

す淨名して紫式部とぞいひける自もいつか是を聞知りさ
らば我名に周ある源氏物語に似たる双紙を作らんと旦夕
心にのけれど書草ざうしのやかをよます歌の二上り
三下り旋頭哥あらで字あまりよしこのどいつを知のみ
あれは紅筆をたお嘴ざりしがある人女にいひけるの河海
のふかき湖月のひろきそれよの眼のおよばすとも要と摘
だる若草あり紅白雛鶴髪鏡小鏡あんどを照し合バ微の意
を解す便とあらんまづ十帖源氏よりよまたまひねとす
められ左言交の注文がさ書房もほとく識得がたく雛鶴
との是あらんと所千代まで翁草これ間違の三番叟若草と
の新内節十帖源氏の淨瑠瑠本の物草太郎と推量して木に
竹本の葵の上後妻討のうち混じ引書も略そるひければさ

て物語をつくり出んとそのところを案するも遠ちかき近
 江店の名も綴りありあがら大路をさじめる車のおと米つき
 うすのさばく夕顔の宿めきて月を見るおたよりわし
 爰も幸空言にも當るといふにも因わる鉄炮洲に知音あり
 観音菩薩のねと人丸のやしろ又詣し石屋の二階に
 假住してをりふし八月十五日月海ばらにうつるをながめ
 明石町に筆をとり延の紙五十四帖蚯蚓書して目も鼻もわ
 からぬ草紙をあらとぬそもくむあしの紫式部の天台
 の深理を極め法華經の裏とやらん六道流轉の因縁を必
 むこ先書たりとか偽紫の今の式部の性質の艶ものにて目
 もとでころして罪のつくれと佛のみちあうとけれバ三觀
 四門一部八卷錢の相場と思たがへ必も賤く詞も賤く源氏

のそぐきていやしきの田舎といふ字に知られたりと賤
 上下をおしあべて笑ぬ人こそあかりけれ

○善惡附込雷座帳序

十返舎一九

寺に飼れる猫に經節を見すれば娑婆で見し與二郎ほどに
 も思はず遊あるき調宿の軒の鶯自然と口笛の音を出すか
 ごとく所に馴て不斷見ると見ざるとの違ひあく人の賞美
 するものあればとて明暮詠めて隅田川の花も塵おあり
 てさるさく今一聲とえたひぬる郭公も山の手の人のかし
 ましきとて耳ふさぐとかやされバ流行の仇討も鼻につき
 て珍しからずと去は方の注文あまかせ慾深き濡手に搦
 む栗餅の醜をおとし焼直しては目覺しにお茶の口取びや
 うしのさゝめの見えぬ六冊物作者の知恵も一舛入る盡の

一舛おちじ事ひひとつ事太郎兵衛駕のさればあし浮世の
人の及ばぬ望に氣をいためるにこんなものかといふとし
かり

○逢夢石序

山東京傳

夫明の狂言作者笠翁傳奇の鷓鴣石を関るゝ古語又曰詩の
有聲の畫あり畫の無聲の詩ありとかや夫のちんぶん寒鴉
阿波坐鴉の浪華の身振殿鷺の京詞蟾蜍目をちく、雀の
ちやつびい赤貝脣腮をだし木兎のだまりつがう甲の蟹の
真似龜の子懸懸で金魚のひかつてぱつかり落をとる 蝸牛
が角をだすの己が遊山あり蠅が棒をつかふの其身の苦海
なり蜘蛛に網をむすんで夜食のかせぎ鷺の泥鰌をふんで
腹とこやす妻こふ猫にこひあれバ仇し野の犬又元常あり

色即是空そのまゝに佛あれバ衆生あり衆生あれバ山猫も
あり柳の下に蝙蝠の山椒くれあゐるのいろく池の泥龜す
ばんがヨウおいたるまでいさとしいけるもの豈介科口技
あからんやと一陽齋をすゝめこみ思ひついたるのべ紙を
出してうつせる繪のすさみ椽の下ある黒犬の身振のとふ
まやどてごんすとかいて見すればコリヤゑらひ受どけた
りや其次の是も面倒な作あれと案じがあらふと筆をとり
小首をかたふけ考れば板元の俵かねて智慧とかさふのち
ゑかそか遅と酒を飲すぞよとせつくよぞちよつくりちよ
つと筆をかう持て眼鏡の月お目の霞字生も靡あ作あれど
こいつのゑらひシヨゑらひと板元大に乘がさてつひよ梓
に錫つけたり身振の則無聲の詩聲色の有聲の雷雨の降夜

一芝はに慰みおほき此小冊をちよつどもとめておくれ
できいか

○腹筋逢夢石二編自序

山東京傳

役の行者の時代にいまだ足駄の齒入も亦く筑摩祭のあ
りし頃の銅の鑄懸もなかるべし漸々又物毎功者おあり春
雨のはれ間と待ての古骨かひふとよびありき五月雨の軒
づたひにの槻竹くど賣來る蚊の背のみじか夜に萌黄の
蚊帳の聲すしく籠馬の罷ながき夜の蠟燭のちがれか
ふもいと淋し監甲のをれ買の夫婦喧嘩の窓をのぞき瀬戸
物の焼つぎの疳積持の門ふたゝすむ臘月夜の眼鏡賣時鳥
の曉傘ひやつこい氷賣の聲おの暑を忘れあつたりい大福
餅にの寒夜をふせぐあんでも三十八文字屋娘形氣の文錦

も昔の髪に結鹿子万事又如才のあさかか小予が如き老鶯
の三日見ぬ間の櫻をまらす流行かくれの古夜着に寐覺を
わぶる二階住むりふの梁で天窓わぶかい階子から作者の
腹の晦日掃に紙屑かえふとひ來るの文意堂のあるじを
りこれ去年若せし逢夢石の後編を賣てくれどの望かれど
後咲の色も亦く二番煎の香もらすしいお船かどゝまやら
くさくいあんでの見たれども燕子花も懐ふるえ服紗ふて
おちをととり茶売も南天のこやしにすれば珊瑚にひとしき
實をむすぶと手水鉢お目と切けて無間の鐘をつく氣おち
りひどい工面の小冊なれば其給たるや百化鳥のおもひき
に似てとんだ靈寶も髣髴たり其言種ふるや鷲の首長いも
あれは矮雞の脚みじあいもあるの鳥屋の様の下かさあつ

めたる作みれば趣向の古枕古折敷案じのうすき襦袢裂裾杉
梳油の貝壳や髪のおちにておもみをとりの作の屑籠取いた
してもとより櫃玉あはざれば價をまつべき貨物あらず
唯捨賣まうらめやく

○腹筋逢夢石三編序

山東京傳

つれづれあるまゝお髭拔鏡おひかひて髭を抜居たるをり
しもものまうくといふ聲あり昔の格子今の堀どうれと
いふも片となる下女がとりつぐ口上も高慢おいへば和國
橋上小船街第二坊の書肆文龜老店の主人俗にいへば和國
橋通小船町二丁目の本問屋伊賀屋勘右衛門お見舞まうす
と入來るあんの用ぞとたづぬるよ逢夢石の三編を書てく
れどのたのみあり聞てびつくり丸で三盃のんだ三度目の

其角もこまる扇の書贊を書きながら小首をかたふけ考るに
昔何某山人が根無草の後編に味噌尽しの序をかきたるの
其器量ありての事予がとどきゆるのうの汁を吸ことだに
わたのざれば卑下尽しこそ相應されどこれを趣向の種と
あし嬉しやさらばかゝんとて己に表紙と折返し硯をさら
す安机ひかふにみだぐり白髭の紙擦の髭の髭渡し髭が似
とて奴でとんすあら關羽や意休のさんお奴の髭宗祇さら
に時雨の世にふるの雪もつ松の胡麻搦髭梅のくふとも種
くふち中あござるが天神髭小林の朝比奈がいつもかはら
ぬ鎌髭や抹香くさいが閻魔の髭生臭のが笑壽の髭菱川が
昔給のやう髭うの髭虎の髭左右にわかる鬼髭や時平の大
臣の怒髭坊主小兵衛がつくり髭チャット髭撫とて高慢くさ

き例あり飽瓜で鯨の髭をかさゆるごとくとりまきりき
作あれハ髭の鱈の美味もるく髭題目のはぬものどか見様
方のかつもりもヲ、はづ渠芋も髭中間髭を墨にぬる此
老武者が戯作といふつかま獅子よくるひ髭すいふん卑下
に髭をしてあらましかくと髭尽髭くひそらしてまやはい
ナア

○廓節要序

式亭三馬

朱子の節要ハ陳奮漢子曰を旨として合類節用の唐僞僕令
の爲に作す爰に余が門人馬笑子が文庫に廓節要の秘本あり
其趣を聞するふ能かき克手管して穴を探の早引也彼と
是とを合符ふ大門からぬ十三門又部を願ハ畫三紋日に美
を飾る其品目を弄るふふるとてらすハ乾坤門彼の細見に

ハの有と無のが官位門文の封のうよふ神國ふ心の神祇門
すいた不好の人倫に娼婆が嫌表徳の名字を腕に彫志支躰
ハ指切髪切も表ハ實虚は裏約に初馴○●の目印ハ是客帳
の數量門義理一遍の淺漬ハ簞笥中の器厨門春の夜櫻福壽
草穂子の裡に樂しむハ草木の部類にして了髻が怕がる虫
ハ氣形門の内よやあらん綿緞羅綺を七ツ屋へ曲るともキ
の字屋の下りを拂ふハ所謂衣食門の苦みも更ハ怕くかさ
んせんどふするもんでおざりイそと廟訛言の言語門合て
十三畫三貫地色の字引客色の諸譯部分も眞草の二道掛る
終季前たとへハ茶を挽く新造ありとも此書ハ買意を悟る
時ハいつも夜廓を早引節用いらがあつきの著述の妙言片
カナの片隅ハ塊で才の有無を量る余が庇を借て彼ハ長堂

を採られん事を獨オソレイスヨとしかいふ
○ 雑談紙屑籠序
十返舎一九

田舎の出合馬の沓を膝履されの摺こすの愁あり飯盛
の年明玉の馬に乗され本土の海せりに歸るの悲みあり
遠國邊鄙の人といへども苦の世界の通れず都會の人
更の事にして兎角命の洗濯せんに少しといへば稍し盛
旅籠屋の飯を喰ひ蒲團きて寐にはたらく雲助おまじなる
旅中のたのしみおしくことあしこゝに雲氷といふ風流人
普く諸國と腰掛あて至らぬと云所あく道路お見聞の珍
しきことあやしき事又耳を取て鼻かみし事かの雲氷の書
集し反古の中より誠らしきと省きて啞バつかりを紙屑
籠と号侍りぬ

火の五行の一にして民生一日もかくべからざるものなり

蜀山人

されどもその災をあすにいたりていひかひちかづくべか
らす天火の猶さくへし人火のつゝしますのありべからず
禍を轉して福とあすの徳をおさむるふあり柳々洲が
王參元の失火を賀する文も小むづかしわれに七字の秘文
ゆり毎朝手あらし口そゝぎ南にひかひて三遍どなふへし
その文にいはいく「家内安全火用心ゆめくうたがふ事あ
かれ

○ 荒御靈新田神徳後序
近松老翁世を戯場よ遊て數の淨瑠を作らるに筑後播磨の
名人有て普く世上に行渡る勸善懲惡を教ふるの一助たる

事是近松氏の本心あり中頃千前軒文耕堂か類も亦近松氏
の意とらうけて作れる所正しければ此道甚盛なりしがいつ
の頃よりか衰て今暇の作者の固そこの所でなく文法をし
らす手爾於葉を弁へず嘲を遠近に傳へ耻を千歳に残す讀
ぬ同士書ぬ同士金銀雷をこのがらす盲蛇物おちすされ
ども五年か三年又一度犬も歩行バ棒に逢ふ闇夜の鉄炮ま
ぐれ當りはくらんの藥のはくらん病が買ふ來る運牛も淀
早牛も淀それれも作者是も作者鴈が飛で見たがる石龜仲間
の宏だんだ組とツペらぶんの鼈作者泥氷も足を踏込首を
すつこめ敬白

○娼妓絹籠序

山東京傳

煙花を將莖の局面に設け娼妓の駒下踏の往來を觀るよ茶

屋み客を待莖子あり籬で私夫よ間莖子あり大通直うして
飛車先の如く素痴曲て角道に似たり初會の席上に初王手
あり馴深の闇中又入王あり色の金銀に有て思案ふなし堅
心の石田も崩れ櫓に圍とも忽ち破る恐るべし巧計のため
に都逼とあらんとを桂馬の詩て歩兵の餌となり香車の慮
りあさひ隠身つ或の飛車手王手の義理に纏られ或の後王
手の借金よ苦む手のあさ時端の歩をつくと苦あする
茶屋の借臨期で二歩をつかひ留守をつかふといへども借
金乞の爲に逃道を失ひ遂に雪隠逼に成あり嫖客と將莖を
圍の一手先の見えざるべし則ち娼妓絹籠を作る予がへば
象戯の及ばざる所段將莖の助言を乞而己

○千秋井の記

蜀山人

東

千秋井のほりぬき井戸より氷と金砂の出し事ハ平澤氏の
 氣さんじに書ちらされしより平澤のひらたくあやまり入
 て外はほるべき穴もみえずされどあがしてくぬけめあ
 き朝白園のもどめいあまがたくこがねの砂の敷をひろ
 いむかし周の國の御家門魯國は殿の名家老をつとめし季
 桓子とやらいふた人あり井をうがちて羊を得られしよ
 家老これをあやしみて千年むぐらのたぐひにやと孔子と
 いふものしりをよびてたづねられし時何やらむづかしき
 事を引て木石の怪を鬼蓄といひ山の怪をもんぐはとい
 ひ水の怪をかつこの尻とやらいふと答へたまひしとあ
 もとより紅皿闕皿の籠耳の事されバ筒井づの井づゝにか
 けし丸でくぬしくぬ覺え侍らす翁がむかしいとけあかり

し時よなくさし物語の耳のそこにてこれるありむか
 しく舌きり雀のからちうバの物語に重兒高籠の中より
 にあやしきもの出かるき高籠よりぬるづの寶出しとき
 く此さびほりたまへる井戸よりこのころもてあそべる五
 冊物の化物の出すしてめでたき氷とこがねの砂の出しこ
 と舌きりそいめのついらのためしあからぬ心まめあ
 るむくひあるべしそれ正直の日天さまあけて淺草のそばの
 名のみにあらずつひお日月の憐れをかうふるかうべよ神の
 宿札をうちまふ所とあんなされバ堀ぬたの井のふかきめ
 ぐみありて若氷はやき車井のめぐりよた幸來るべしとま
 うす

○里のをだまき評自序

風來山人

莊子^{しやう}が寓言^{うんげん}紫式部^{むらさきしきぶ}が筆^{ふで}すさみ司馬^{ししや}相如^{さうじや}か子虛^{しよ}烏有^{ういう}弘法^{こうぼう}大師^{だいし}の兎角^{うかく}龜毛^{きまう}去^さりて久^{ひさ}しい物^{もの}あり予^よも亦^{また}彼^{かの}虛言^{しよげん}にあらひ氣^きのまれの麻布^{あふ}先生^{せんせい}古遊^{こいう}花景^{けい}の人物^{じんぶつ}を設^{たて}て訛^{まが}八百^{はちひやく}を書^かちらす針^{はり}を捧^{ほう}にいひちし火^ひを以^{もつ}て氷^{こおり}とするの我^{われ}が持^もまへの滑稽^{こけい}おして文^{ぶん}の餘情^{よせい}の謔言^{たはぶ}あり或^{ある}の所^{ところ}々の地名^{ちめい}あんと人の耳^{みみ}馴^なたるに便^たりて直^{ただ}ふ其名^{そのな}を出^だせども固^こ作り物^{もの}語^{かた}なれば實^{じつ}に此事^{このこと}のあるにあらす見る人^{ひと}怪^{あや}べからず

○奉加帳^{ほうかちやう}序^{しよ}翁名^{おきな}燕斜^{えんせう}又号^{またごう}豆三^{まめさん}

蜀山人

燕斜^{えんせう}が別業^{べつぎやう}に題^{だい}せし日^ひの囊^{ふくろ}中^{ちゆう}おのづからまんくたりしが豆^{まめ}三^{さん}暮^ぼ四^しのいぞきみも引^ひ込^こ紫衣^{むらさきぎ}の隱居^{いんきよ}とありての澁^{しぶ}園^{えん}扇^{あふぎ}をばうちすて、柿^{かき}の衣^{ころも}の奉加^{ほうか}せよとさる大檀^{だいたん}那^なのそゝめよまかせ鬼^{おに}の念佛^{ねんぶつ}の大津^{おほつ}繪^えの万人^{ばんにん}講^{かう}の催^{もよほ}ふ心^{こころ}もいと

せりあづあ五行^{ごぎやう}たびらて佛^{ぶつ}の座^ざ臺^{たい}座^ざ後^ご光^{くわう}も煤^{すす}びたるすゝあすゝしる箔^{はく}しるの建^{けん}立^{りつ}思^しへば春^{はる}の一^{ひと}籠^{かご}の土^{つち}一^{ひと}升^{しやう}よ金^{かね}一^{ひと}升^{しやう}とつかへ兵衛^{べいゑ}の冥^{みやう}加^か錢^{せん}の御^{おん}心^{しん}持^{もち}次第^{だいだい}第^{だい}秋^{あき}の七^{なな}草^{くさ}一^{ひと}葉^はヅ、お志^{こころざし}をまつのろのちりもつもれば山^{やま}く有^{あり}がたく奉^{ほう}存^{ぞん}存^{ぞん}以上

○燕斜翁^{えんせう}をいためる詞^{ことば}

蜀山人

燕斜^{えんせう}が別業^{べつぎやう}お題^{だい}すと戯^{たふさ}れしも三十年^{さんじゅうねん}あまりしのはすの池^{いけ}のふるさびかしめてみよ菊^{きく}の盃^{さかづき}をくみて管^{くだ}を巻^ま物^{もの}くりかへせしも七百^{ななひゃく}とせとやすぎぬらんことしむつきのはじめ朝^{あさ}の雪^{ゆき}のかへり足^{あし}にさかやまひをとさ彌^や生^{せい}のつごもり何^{なに}がしの園^{その}のまるとるにふかみ草^{くさ}の花^{はな}みしを此^{この}世^よのかざりとしてさつきの末^{すま}に身^みまかりぬときくにもむねつとふたが

りてとまにゆきとふらふ事あたはず年ごとの春のはじめ
に手づから七草を植ておくれる事あと思ひ出るよあ草
蔭目わたる鳥のすまやかあるがごとく春ごとのに贈れるさ
みがほとりの坐へすやもとの五行たびらこせりあづあ
つみもむくひもなき身にいさぞ後の世のすいあそいえろ

○膝栗毛發端序

十返舎一九

鬼門關外莫道遠五十三驛是皇州といへる山谷が詩に據て
東海道を五十三次と定めらるよしを聞けり予此街道も毫
をばせて膝栗毛の書を著す元來野飼の邪々馬といへども
人喰馬にも相口の版元太或をうつて賣弘めたる故祥よ乘
人ありて編數を累ね通し馬とあり京大坂および越州宮島
までの長丁場を歴て歸がけの駄賃に今年續五篇岐蘇路よ

いたぬ彌次郎兵衛喜多八の稱異國の龍馬にひとしく千里
の外に轟たれば渠等が出所を問ふ人有依て今その起る所
を著し東都を鹿島立の前冊としおくれ走に曳出したる馬
の耳ふ風もひかさぬ趣向のとなつて置と柳からおろして如
斯

○修紫田舎源氏第十編序

柳亭種彦

熱湯好湯番にいへらく湯のあつくしておくこそよけれう
めれば何時でも温くなる温湯好湯番にいへらく湯の温く
しておくこそよなれ沸せば何時でも熱くある是お似たり
し事のゆり初めてこの田舎源氏を作いでんとしたる刻
老たる友人手に日いかよも源氏の條をくづさすなるべき
程の詞をも其儘用ひて書たまへ源氏を讀ざる童子のすま

しの助となる事あらん若き友人手に日源氏の條を翻案し
て歌舞妓狂言浄瑠璃のちもむきに綴りたまへ源氏を讀ま
る者やいある予思ふに源氏の如く書と教へし老人の熱湯
好あり狂言歌舞妓のやうに綴れとせしめし人の温湯好な
り是またどひて初編の草稿いくたびか書かほしまづ若き
人の意見あつた泥藏の物がたり人丸堂の無言場温く仕込
でおいたれど標題の源氏がさめて氷あきらうと巻々の詞
をそろく折くべて去年今年と沸しかけ既に十編に及び
しがこの湯の加減未分らず赤本あつらぬ詞が多くて
熱て讀うくはばさば仙雀堂を叩たまへ次の編より狂言の
氷をうめて温くせん板元の湯屋の亭主作者の湯番あ異な
らずどうでもあうでも這入人がおほければよいまでよし

て一家の作と見識ぶつても戸棚ががらりと空てゐて眼
氣がさして居たまれす十能で運ぶ消炭に當りつゝいぢ
またいが願ひされば御容様方の御意にかかふやうにと井
戸ならねども彫をゆらため竹の筧で板の間の摺仕立を奇
麗にして新米糠の袋入随分出精つかまつり明年休の札を
掛紙拂底に付直あげといふ場をこたえた代りに現金湯
の御承知のうへ御買いを可被下い

○ 癩疹與海鹿之辯

式亭三馬

旅行を思ふぬもの名所國會も面白からず戯場を看ぬ
もの俳優話説も耳にいらぬ和州願歴して自家へ回れば
舊地勝景を思ひ出して卒然に道中記が見えくるり一回句
欄と覗てい今やで嫌の優子説も自己とする氣よなるの哉

申童嫌が傍倚らんせの愛敬にぐにやとあつたる一般よし
て見ぬ浴陽談話もとより感情ある味道をしらざる所以
り細見を開けばまづ舊識娼の名を去のべれ麻疹がはやれ
バ俄に麻疹の書を見たく思ふの都て世間の人情あるべし
ちかきまで談義衣裝に定つたる正鉄色がはやり出すとそ
こらだらけが丁子茶だらけ流行物といひあがら男の髪
のまそく短く女の鬘の面より強大五歩異田の腰帯の男
子のしめるものもあり酒の手巾の婦人のかぶるものにさ
まりて往古来今さきくに移り變るもまた浮世ありされ
バ御江都の消金場繁華の地方の新様物一ばん中つた物あ
れバ廣の出る事速あり時花東西の喬人が多くこの街
術にも七種茗漬かしこの十字街にも福徳煎餅養たり交た

り虚擬假物が正舖か本家が偽物か汝が予か不佞が足下や
ら吾勝に利を射る們的の多き世にも流行て喬的のあきもの
の這般の麻疹あり斷工の本來无く有九處が假てもつまら
す没法匙を放下れば又拾ふものありて醫人の假侶する素
人療治の包紙の表書にも煎法如常と清朝風で囁詐して段
正舖の買契か魚市街の交盤冊かどよめぬやうみにじくら
ねバ國手めかぬと心得るが白癡誰の初熟ありさるが中よ
も販薬生を似せる賣薬多く横町のままふたや新道のわや
しの出格子連牆よ麻疹の妙薬くと官標的の筆意を露は
し筆ふとに見えらせたる松板の間あ合招牌井の牌を斜に
睨らんで路次口よまでぶらさげし欲心表に出透あり其
効驗の妙く奇く孰れを聴ても神の如し嗚呼大いある

かな癩疹の行はるゝ夫是を見て察せよおのれも頃日痴疹
を患て漸く出透のけふとあれどうちついく霖雨のこれ間
もあければつれづれあるさゝのかとよと節前の心機もあ
く子と病に勝れねど債主の分説に恰好の病ありとひと
りつぶやきて居る扉をはとくとどかどつるゝの欠込んで
来る女兒のあてもあし爰で氷鷄も古いやつすと押たり
くと寐て居ながらの應答も例の懶墮的なれば他もかの
づからゆるしたまへと入来る客の面を看るゝ鹿子まだら
の銅墨だらり顔色すべて正黒あるゝ牛兒お引れて善光精
舎の自慢する信濃の國の人民大食冠の苗裔と聞えたる隣
家の甚大といふ飯焚漢あり賓主の禮もへちまもかまはず
づりくと入り来るおど又故卿の書版をよませせにや来る

下漢何事あるやと起身るに彼が曰ちと承りたき子細あれ
バ窺下を終や否即便参つゝり先生に伺ふ事余の儀よあら
す頃日世間に行けるゝ病名をハハカといふもの七人あれ
バアハカといふ人三人ありいづれか是あるやいづれが非
ありや同僚子弟の爭論晝夜よやます負業と贖ふに大福餅
を以てし二合半酒をもつてす其甚しきに至つての身價の
方銀三片これが爲お危し先生よろしく我が爲に教示した
まへと左右の眼を尻腰おかいしき居さまの草書道の字
あして編伴にまがふ綿布裕の染摸様の色までもぬと興さ
先て覺ゆるにぞ含笑半分正面よ殺し冷た薬とぐけと吃恰
好の咳拂ひお勿躰をつけと答て日嗚呼其争や君子ある尤
あしかといふ病の別お一種ありといへども當時はやるの

はーかありはしかとあしかと比くの奉書ふ炭團木履と夫
贈龜兒と天道さま何と違ふあり早く賭の酒を吃りハシカ
くと答ふるにぞまがらばとしかに疑なきまかとしたる
証據を給へ先月の事なりしが東國方の里醫の言にわしか
くといふ事を吾儘も聞きこゝあ於て疑惑を生ずそれ
お飯を食ふ人すらあしかといふの心得ず先生これハ奈何
と云ふイヤく夫ハ僻耳あるべし假あも神農の異侶をす
る生薬師の身分として病名まらぬものやハあるすべて東
奥の人言語鼻あかゝるがゆゑに五音律呂の開閉わるくて
はしかもあしかと聞ふるあり國々の方言さまざまにて一
ツ二ツを爰にいハ、蛭蜂蜻蛉蟹蟻と清濁わからぬ首もわ
り江戸から一夜に乘附る眼と鼻の間ですら引き窓の紐を

引張なくといふに引をツたゐらがら引つ切たといふが
ごとく國癖の事ハ夷曲にも大和かい西ハあぢかを關東べ
い都ござんす伊勢ありやりますとよみたれば浪速の蘆も
勢陽の濱菰其國其所によりて言語もさまざま變りあれども
アシカハハシカの僻耳に疑ひなしと辨ずれば甚太平面ハ
微笑を含み有がたしく先生のおかけよて銅壺を灰汁で
磨た如く麻疹の生疑さらりと解たりマア又あしかといふ
病別ハ有やと根問の疑問せんかた案をトシとうち口から
出まかせ方底圓蓋て曰夫熟あしかの病症を監るに本草綱
目獸の部に海獺ウミウツといふもの有り大ささ犬のごく
脚の下ハ皮あり頭の馬の如く腰より以下蝙蝠に似たり其
毛瀬に似て大なるものあり其形獸と魚との生淨二役乞巧

孫真人とゆふとも宿昔より方論ある事を聞かず誠あるか
 國醫さんでも神祇さんでもわしか病の治りやせぬどうた
 へる實に難治の症ある事金の草鞋で尋るども外ふない
 ぞやわしかの妙藥海類といふ獺話因縁此の通ぞと辨に
 まかせて説付ればかまへの僻説御尤唯々として點頭去ぬ
 蜀山人

花のさうりに月いくまききをのみ見るものかはとあらび
 が岡のすねものはいへれど花の立春より七十五日の三
 五夜中の新月後の月もまためでたし雪の豊年の貢物とい
 いへどつめたく跡くさらかしもうるさしと明阿彌陀佛の
 ふみにもかけりげにふるとても若菜の價たからさらぬを
 どこそ門田もる犬もよろこぶべけれ

○辰巳婦言序

式亭三馬

色好ざらんといへる日本の放蕩家傾國とそのかす漢土
 の狂費家貴妃が淫婦無盤女が醜女薄情惡意心實も悉皆皮
 一枚の戯からずや蓋義理一遍の通情の結句心のもめる種
 割て見せた死女郎の腸呑込姿の江戸子の根生骨と醉道の
 眞水ふ晒して一寸南鏡一篇の書を著し金の鮎管版打たる
 諸君子の覽に呈と元來戯論の書と雖も聊悟道の捷徑あら
 んハテ足下人間一生魯生が夢樂しみ僅二十年ナソレかち
 かい内と云爾

○後日荒御靈新田神徳口上代作
 軍の勢の多少によらず芝居の水物とい昔のら負としみに
 能中事あれども終ぞ是まで辛がらて足ついたためしもある

ければ止るお相談さのまりしを去方様のは異見に去ど
お江戸の廣いととえらあいか二丁町を聲色をつうふて通
り吉野丸でさわけば又たりでも諷ふ主水の表で駄菓子
賣越後屋の門と切賣が通る晝三から夜鷹まで夫相應に賣
るといふがお江戸の廣い證據あり裸で物の落さす女角力
で翠丸をつめためしあしと闇雲にすめられ運の天に
ありぼた餅の柳あり下りの隣にあり此方に何あもあ
けれども其代金の出し人もあければ請子をしてはる様あ
心持にてはさいた所が元直あり入らぬ所が平氣とやもや
つとりへらす口屋ねの破た一徳に兼あがら月を見るとい
ふて味噌を上る理屈にてろくあ事でのあければとも只は見
物様のほひいさを下りの太夫三粒とも守り神とも金主と

も是三り願あて心一盃の思ひ付福内鬼外先生の新淨るり
を出せとも衣装もあければ道具もあし江戸のお氣でいお
目まだるし大山は參詣の道すがら旅芝居を見るが心にて
悪い所が面白い不出來あ所もこいつのよいくと委細携
はずお譽あされて見物の程奉希上い

○流餅酒論清水餅口上書第二番 風來山人

私餅店の義町中下戸様方は最負は取立と以段々繁昌仕
ありがたく奉存候然る處此あひだ底貫鑿右衛門様とや生
醉様は出あさる巻舌にては意被成まするのヤイ亭主清水
といへば氷又縁ある酒をこそ賣べけれ何ぞや野夫あ餅店
を出し下戸めらをうまがらせ錢をせしめんとの謀言語道
斷の次第あり汝が口上書を見るお皆身勝手の手せりふあり

汝が口上書を見るよ昔餅ほど穢らひしき物のあし先痰持
の胸を苦し先痴氣持のさん玉あもてあつかひ女郎の末の
積持とありかげまの果ての痔持とある子持の女の色氣を
さましやきもちのあいそをつかさ不器量のあくたいを欄
のら落した牡丹もちといひ蒲團ばかりの獨寐をかしの持
と異名せりとりもちの殺生戒を破りむぐらもちの植木を
そこなふ秩父におやさき持あり四國は犬神持あり賤き事
を荷持歩行持と云無首尾の事を手もち無沙汰といふ身持
氣質の附合をえらす餅喰の相手がいやがる鎗持の鎗を遺
はず金持の金をつかはず辨當持先へ喰すかゝる不持の餅
もゑに下戸の建たる窠のあゝ早く相止め然るべしと青筋
はつてぞやなる

○巢がものさく 蜀山人
月令の月行事の菊に黄花ありとてふた茶碗の菊味を味ひ
五斗米のそて扶持をいやがる五柳先生のさくをまがきの
もとよとりて白丁の徳利の來るをまつ又はとけくさい還
花すきの濂溪殿の菊の澁谷の隱居とやら隱遁とやらいは
れしがちか比巢鴨の五軒町七軒町もいつしか五十軒七十軒
とありて駒込染井のはてまでも百種のつくり物千狀のば
け物所せく東籬も花壇も百姓屋も酒さかち即席料理十
玉の勸進もくはふがため十念の和尙さまにくはぬがため
も又ありがたし

○戲場粹言幕の外序 式亭三馬
海鼠蟹を笑て曰く行くか歸るか歸るか行くか蟹海鼠を嘲

て曰く尻が首か頭が尻か云々近來滑稽本廣つて泣本と
り青本變じて赤本に歸る滑稽本青本の眼より泣本赤本を
指して野暮と笑ひ不洒落と嘲る時亦泣本赤本の目より
も行過と嘲り假在行と笑ふべし善惡正是入我我入滑稽地
に落て戯作者脚へ上られ空しく口を閉で後る、流行を嘆
するのみ傍み貸本屋ありて曰く頃日専ら忍テヤリ本行の
れて世に盛んありまうも切落へ落て克板元の米櫃を潤す
利を射る本屋が欲心満々意氣でも慷慨でも何でも角でも
えりどつて十九文より下直に扱ひ野暮でも賣れるを貴む
事宜ある哉文を筋るに俗語を切抜手兩葉もまらぬ陳腐呆
の樂屋で聲を啞すのこにして見物の耳も遠し漢の倭の古
事來歴あのものゝと書く問わらば鼻の先にふらついた

芝居見物の情を穿ち有の儘よめあかけて賣れるが膝と
發明し給へ盲目三人目明千人泣が不洒落か賣れぬが滑稽
かと本屋あ一番張込れてこいつ大に誤つたりと蟹と海鼠
の理諭を悟り尻か首か歸るの行く跡先もあき趣向を撰
て本屋の口に糊すまバ夫で作者のお役の濟ひ噫嘻さうぢ
やちと筆を採戯場粹言幕の外と題す洒落か不滑稽か一夜
演思ひ付て例の如く早掙の分解序の名代にまかいふ
○酒色財
蜀山人
一休の兒を若俗とよびある人役者を男傾城と名づけて老
年の樂とせりひべも日月江海のでんぼうに風雷鼓板のま
やざりとい天地一大戯場の中に乾隆の座元の名言あるべ
し又あし引の巨燧お伽羅をくゆらせ太夫とふたりかもね

んとい油煙齊言因のうたにして小傾城もさてあふらんと
の晋子が師走の廿日比よりみせを引たる内證の遊びあら
んさべて劇場青樓の樂の老少とあく雅俗とあく此上やあ
るべきされど難波の西鶴が野郎翫びのちりかゝる花の前
に狼のねてゐるごとし傾城にあじむの入りかゝる月の前よ
燈灯のあい心ぞかしと好色一代男あ書しもことなりなり
さて又儀狄とやらんがはじめてつくさる狂水といふもの
こそおかしきものあれ上戸のおかしく罪ゆるさるゝもの
なりと又が岡の色法師もいひ盃のはりあゝ乱酒の淨無
用と親父ものたまふ五戒の中でも遮戒とやらとそこしこ
とばの濁りしよりその槽をくらひろのまをすゝるもの
すくあからずされど此酒色のふたつも財といふものあ

てのその樂を得がたし思ふ事ふたつのけさる其あとい花
のみやこも田舎なりと芭蕉の詩もすされ三不感と口ぎれ
いある唐人の寐言も心もとましその財を生ずるゝ大違あ
り食ひもの小勢でくひ仕事の大勢でせよこれを用ゝるも
の舒ある時財つねに不足あしと大學にもみえ民生の勤
るにありかせぐに追ひつく貧乏あしと左傳あのせしもこ
ゝらあふりあるべしねがひく金の番人守錢奴とあらで
酒色のふたつもほどよく樂まば五十年も百年もひかひ百
年も千代よろづ代の心地なるべし
きよみづ餅口上代作
世の上の下戸様がたへや上ひそも我朝の風俗あて目出た
事にもちひの鏡子もち金もち屋敷もち道具に長持魚に石

もち廓座もち牽頭もち家持は歌名高く惟茂武勇かく
れきしるゝるめでたき餅ゆゑに此度おもひつきたての器
物もさつぱり清水餅味の勿論よいくと最負は評判の
は取もちにて私身代もち直しよろしき氣もち心もち嗅も
やさもち打忘れ尻もちついて嬉しがるやう重箱のそみか
ら隅まで木は餅のなるは評判奉願以上

〇傾城水滸傳二編序

曲亭馬琴

八百屋の賣物八百色に限らず學者の十千屋され物多し大
を語らんと欲すれば駱駝山鴉もとふりにたり小を聞らん
と欲すれば漁獵角艇の下段もものかひ柔さを好る人に
の笹之雪も數あらず堅いものを悦ぶ客あひ棒香の喉もい
まだ足らず神事舞のまゐると雲雀獨樂より遠く藤八五文

の走ると機關泉も終ふ及ばずされば去年の流行より今茲
の不易にますとあらじとは是より先あ著せし傾城水滸の初
編の評判よし野と聞ば櫻木は鐺らし甲斐もありまから
バ后をと繼三粒の三もち四條の燈心もろとも氣根をへら
す夜並仕事もくせの憑るづるけの本店運の承知である
けれど鶴屋が頸を長くして松に壽く千世萬代春の仕入あ
聞を合しゝるだらゝ急々如律令は覽の通り女才あく序
す

〇嫩葉相生源氏後序

風來山人

古語よ曰すも長さことあり尺も短さことありとされば木綿
を買者の價少ふして其丈長しといへども長しとせず錦を
買ふもの價多して其丈短しといへどもみぢかたとせず

予が戯み作れる嫩葉相生源氏九段續なるを東都の芝居
の習ふれば末の三幕をのこし置評判をだいにて稽追々に
出さんと先六段目まで取組けるに當正月二日より如月下
旬の今に至るまで引續ての大入棧敷切落のいぬもさらあ
り二の手をのけて見物雲の如く集り舞臺の後人の山を築
く入るあまへ勝も乗て末三段の趣向のみにていまだ筆
をさへ探らず去かるを淨瑠璃をこのひ人々をさりに正本
を望むと本屋が錢をやしがるどにうががあらうよ止とを得
す物足らぬ正本を出しぬ手紙木綿の地太おしてしかも丈
の足らざるをもひいさの目にし蜀江の錦とも見違て跡の
出るを待たまへかし

○平荷集序

蜀山人

胸中に萬卷の書あく眼中に天下の奇山水あければいまだ
必しも文をよくせすたとひよくするとも女わらべのこと
はなりとのもろこし元朝の吳立夫がことばなげり明誠
堂平澤天壽平格子菴鑿して平荷翁とよふ胸中も万卷の稗
官小説をたくのへ眼中に天下の人情世態を盡し上りやん
ことあき王侯大人より下りあやしの倡優隸卒あいたるま
でことくくみてつまびらかに誦したれば心あ思ふ所筆
よのらすといふ事あく筆の動く所こゝろのことくあらず
といふことあしむべあるかあ誹諧に月成の號高く戯作に
喜三二の名とつたへ狂歌に手柄岡持ありて詩をつる釣針
にひとしく狂詩も韓長齡と稱して平仄の調を刻すべし狂
文にいたりて一流の文法にして人の氣のつかぬ所をう

がち人の意表お出る事を樂ひ思へばひかし郎の國のは留
 守居東里の子産といふ人ありてその國の辞命を潤色すと
 きこえしもかゝる筆にやありけんかしことしその子大奇
 ぬし父のかきのこせるくさくをわつめて一鎧とし舊友
 國乘燕斜の二子よことづて予が序をもとむる事まきりあ
 りわれ朝夕のいとまあくて一日くんとすぐせしうちに燕
 斜も巢と辞してどこよの國にいりぬればわが身さへ心も
 とあくとき筆とりて同じ心の圓乘のもとにかくりぬ平荷
 翁とたまわりの破顔微笑したまへ餘人のしる所おあらじ
 かし
 ○荒は靈新田神徳口上後日代作 風來山人
 先達て奉や上し通二文四文のはした芝居誠お海老雜魚の

魚まぢり一寸法師の背くらべさりとてのあつかましいね
 りま大根で太いの根と来た万八芝居と伊阿も可被下所判
 官最負會我最負弱い者を見捨ぬの賣願母しきお江戸のは
 氣象有がたいのてつへんおて屋根の穴から雨の漏をもは
 いとひるくは出被下しは最負は憐愍を笠に戴きとうやら
 かうやら芝居の様お物も成掛り偏おは産取立故と難有
 仕合よ奉存い何をがて伊禮は慰に相成し様にど心のやた
 けにはやきどもおい抽の振られず瓢箪から駒も出ねバ金
 主から金も出す提灯で餅つく様お氣ばかりあせつて持味
 す鎧ふんばり身代かぎりゑいやつどの思ひ付にて來る廿
 七日より七ツ目の泥仕合八ツ目九ツ目大切迄追々出し奉
 入は覽いへども是以道具衣裳そこらだらけが不都合だら

け 伊目まだるさの勿論あれども悪ふても能負ても勝じや
 と ぼ町中様は最負の伊蔭を以て此度の四幕目遊園局の氏
 子をはあれリンくリンに引かへてゑいとうくとは見
 物幾重よも奉願上い

東都八大家戯文上編坤終

明治十五年十一月十七日出版御届

十五年十一月二十五日出版

定價三十五錢

纂輯人

新潟縣平民

松村

操

東京神田區佐久間町
二丁目十一番地

出版人

廣島縣士族

岩崎

好正

同神田區雉子町三十二番地

發兌書肆

東京日本橋區通二丁目
 同芝區三島町
 同神田區雉子町
 大坂北久太郎町
 同備後町四丁目
 西京三條通寺町

稻田佐兵衛
 山中兵衛
 巖々堂
 柳原喜兵衛
 此村彦助
 福井源次郎

東 京 書 林

北丸	北島	水家	山野	山孝	報中	石川	北澤	萬字	法德	小新	博聞	江島	兔屋	原亮	青山	稻田	內田	土屋
茂善	慶次	孝之	野之	中北	告北	新伊	字伊	德兵	新兵	兵	兵	喜兵	島兵	亮三	山政	田清	忠兵	兵
七衛	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎

栗田	空山	須原	別所	內藤	小笠	秩原	牧山	出野	坂寺	柳上	小川	奇林	吉文	春川	島屋	大角	加藤	東藤	深野
篤信	篤信	平鉄	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門	右衛門
二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎	二郎

大坂	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
岡島	前川	此村	吉岡	村上	田中	藤井	尾張	伊勢	陸前	信州	高知	相州	上州	同	越後	上州	長崎	長崎	長崎
善兵衛	孝次郎	平助	勘兵衛	治兵衛	孫兵衛	東四郎	本町	東助	利兵衛	喜太郎	喜太郎	喜太郎	喜太郎	喜太郎	喜太郎	喜太郎	喜太郎	喜太郎	喜太郎
尾州	上州	陸中	筑前	備前	同	甲府	甲府	加州	下總	常州	上州	羽前	阿波	信州	靜岡	勢州	安中	安中	安中
半田村	高崎	盛岡	博多	山岡	同	常盤町	常盤町	金澤	堺町	下妻	藤岡	五日市	德島	上田	吳服町	松坂	中兵衛	中兵衛	中兵衛
小栗	文心	井上	藤井	渡邊	阿部	內藤	徵古	牧野	文正	文正	文正	文正	文正	文正	文正	文正	文正	文正	文正
太郎	公道	正助	孫次郎	源米	勝忠	右衛門	古堂	作平	正堂	正堂	正堂	正堂	正堂	正堂	正堂	正堂	正堂	正堂	正堂
千乘	尾州	羽後	越後	上州	下總	常州	仙臺	野州	越前	越後	加州	三州	武州	岐阜	函館	高知	下總	下總	下總
千乘	名古屋	酒田	十日町	富岡	佐原	土浦	大門口	朽木	福井	新發田	金澤	西尾	府中	太田	大門町	本町	古河	古河	古河
立志	石版	報國	木田	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文	正文
舍	舍	社	三郎	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛	利兵衛

巖々堂發兌書目

勝海舟先生題辭、坂谷朝廬先生校閱
松村操君編著

○近世先哲叢談

正續篇二冊 定價金五十五錢
後篇 同 金五十五錢

前編ハ賢著ス所ノ先哲叢談ニ續キ先生多年ノ力ヲ盡シテ編纂セラレシ書ナリ此編ニハ中井竹山翁以下二十二家ノ嘉言善行ヲ擧グ後編ハ皆川淇園翁以下二十二家ノ言行ヲ擧グ洋學家ヲモ加フ寛政以降名譽籍甚ノ大儒碩學ノ列傳ヲ撰テ以テ纂輯セルモノニシテ嘉言善行ヲ一ニ目ノ下ニ羅列シ直ニ古博覽ナル有リ輕俊ナル有リ執拗ナル有リ貴書中記スル所其言行ニ至テハ篤實ナル有リキハ温故知新ノ該柄トナスベシ今般弊補ニ於テ發見ス請フ江湖ノ諸彦一讀シテ此言ノ妄ナラサルヲ證シ玉ハシム

久松義典纂譯
西一革命命史鑑
正編三冊 定價各金五十五錢
續編二冊 近刻
斯書ハ泰西諸國民權ノ盛衰國會ノ興廢及ヒ政黨ノ起仆ヲ敘述シテ自由ノ元氣ハ萬世復タ滅息セサルノ實蹟ヲ明ニシ又偉人名士ノ言論功業ヲ世運人心ノ變遷發達スル活潑ヲ示シテ永シ志士ノ模範ヲ垂レ且ツ後世ノ鑑戒ニ供シタリ殊ニ續編ノ如キハ古今希有ノ大變亂ニシテ一部ノ血史ト稱スヘキ法蘭西大革命ノ事蹟ヲ紀述シ煥密ニ古キス簡短ニ失セズ大ニ體括斟酌スル所アリ以テ看官諸彦ノ電覽ニ便シクシテ諸彦請フ購讀ヲ吝ムト勿レ

政黨盛衰鑑

全一冊 近刻
定價六十錢

久松義典纂譯
本書ハ政黨ノ主義性質及ビ効用ヲ總說シ次に英國近年國會議員ノ改撰及ビ内閣更迭の成蹟を記載して改進黨の勢力の如何に強大にして保守黨の如何に微弱なるかの微語を擧げ且附録に該國官員の種別俸給及び貴族の種別人員等が官等表をも採録して坂谷朝廬先生問
石井南橋先生評
中山政陽編輯

英跡題圖詩史

全二冊 定價金四拾錢
郵稅 金六錢

夫國朝史乘ノ浩穰ニシテ一朝讀盡スヘカヲザルハ夙コ歴史家諸君ノ憂ヒト爲ス所ナリ然ルニ本書ハ我國ノ碩學鴻儒カ古來英雄豪傑ノ吟詠シタル所ノ全篇玉什ヲ蒐集シタル所ノ良書ニシテ且ツ每篇後ニ於テ其英雄豪傑ノ事蹟ヲ討記セシメテ一讀瞭然ク朝歴史ノ事蹟ヲ知悉セシムルモナリ故ニ本書ノ發行ハ實ニ國史浩穰ノ一憂ヲ除クト云フモ敢テ其不可ナキヲ信ス江湖ノ諸君ハ必ズ購求瀏覽ノ上吾言ノ謬妄ナラザルヲ諒セテレヨ

國會大要

全一冊 定價金廿三錢
郵稅 金四錢

今我國ノ一大急務タル國會ヲ開ント欲セハ先ツ其體裁方法ヲ詳セザル可ラス然ニ此事タル我邦未曾有ノ洪業盛舉ナレハ汎ク法ヲ泰西諸國ニ資リ以テ其英華ヲ摘ムコアラザルハ則テ完全ナルヲ得ズ此書ハ歐米現今國會ノ體裁議院ノ權限代議士ノ性格及ヒ其員數ヨリ議院開閉ノ時期ニ至ル迄詳載ノ漏ナクレハ一讀以テ歐米二十餘國

國會ノ要領ヲ知ルヲ得ルヲ發中ノ物ヲ探ルコリモ易シ切ニ願ハ三千五百万ノ同胞諸君先ツ此一大珍書ヲ購讀ノ其要領ヲ諒知シ然後ニ我國國會ノ開設ヲ議セラレシテ

世界驚新話

該書ハ或ハ驚カシク或ハ感ズル世界の大珍怪物を擧げ奇を加へ仮名を用一婦女子も解し易くし讀者をして不思議奇妙と手ヲ拍せ管見を以て物の測られざるを示一開化に導んと爲る面白き書あり

中村敬宇先生序、松村操君編著

東洋立志編

右ハ西國立志編ノ体ニ倣ヒ日本支那學士俊傑ノ言行ヲ輯録セルナレハ一讀以テ志氣ヲ興起スルニ足ルハ亦言ヲ俟マサルナリ請フ江湖ノ諸君購讀ヲ賜ヘ

高談集

該書ハ有名ナル沼間先生ノ演說セラレタル論文ヲ纂輯シ並ニ像畫小傳ヲモ加ヘシモノニテ其論旨精確其ノ辭理明晰彼ノ一片ノ不平ヲ洩スノ過激論士ト同日ノ比コアラズ冀クハ江湖諸彦幸ニ一讀ヲ賜ヘ

山居物語

全一冊 定價金四十錢 郵稅 金八錢

村田文夫先生題辭、木村陸一郎著

板垣君遭難顛末

此書ハ木村先生深ク培玉ノ桃源ニ在テ今日吾邦ノ政策ヲ痛ク論述セラレタル者ナレハ當局者ハ固ヨリ論ナク奇モ今日自由自治ヲ主張シ三權ノ鼎立セザルベカラザル所以ヲ嗚ラシ國是ノ如何ニ注視シテ常ニ邦家ノ病根ヲ憂フルノ志士ハ必ス一讀スベキノ長書ナリ請フ既家ヲ以テ自ラ任スルノ諸君陸續購讀ヲ給ヘ

新聞歷史

我國新聞紙ノ行レテヨリ茲ニ廿余年其間政治ノ沿革時勢ノ變遷ハ盡ク新聞雜誌ノ興カリ關スル所ニシテ而シテ其新聞雜誌亦ク自ラ其沿革變遷アリ居常新聞ヲ愛覽シ心ヲ邦家ノ興隆衰替ニ注グ者豈ニ之ヲ詳記セクノ可ナラシヤ抑々此書ハ我國始メ新聞紙ノ行レシヨリ爾后之カ發刊廢業刊行禁停題號ノ改更紙幅ノ擴張記者ノ處刑等奇モ新紙ト關係ヲ有スルモノハ免毫ノ微モ洩サズ悉ク之ヲ網羅蒐集シ題シテ新聞歷史ト云フ四方ノ諸君陸續購讀ノ榮ヲ賜ヒ爲メニ洛陽ノ紙價ヲ高カラシムルニ至ラハ獨リ

高垣守正編輯

婚姻奇談

該ハ米人フート氏の原撰ホして世界婚姻の風俗を網羅して餘す處なく詳説し且つ

定價金三十五錢 郵稅金六錢

全一冊 定價廿八錢 郵稅 六錢

附載從相原尙裝傳 定價金拾二錢 郵稅二錢

5/36

67
合
88

男女交際の状況を併説し及び人物の實体を眞寫し婦女童蒙にも理會し易からしめ其に其奇異ある人をして肉味と忘れしむ些々たる小冊子ありと能く各調の風俗を寫せし書ありの當に婦女童蒙のみならず苟も世の事情に注目せらるる諸彦の座右の書とせ

總生寬編輯

精艶曲集

上編 十八錢
中編 十八錢
下編 二十二錢

右の義大夫清元常磐津長明富本月琴の譜新内一中節琴歌園八節上方地歌及び大津繪都々々の新文句に至る迄凡る世間を行ける音曲一切の内にて妙の妙美の美として歌ひ出す所を殘らず抜き集めたる者にして古今比類なき通人の種本なり

久松義典纂譯

全一冊

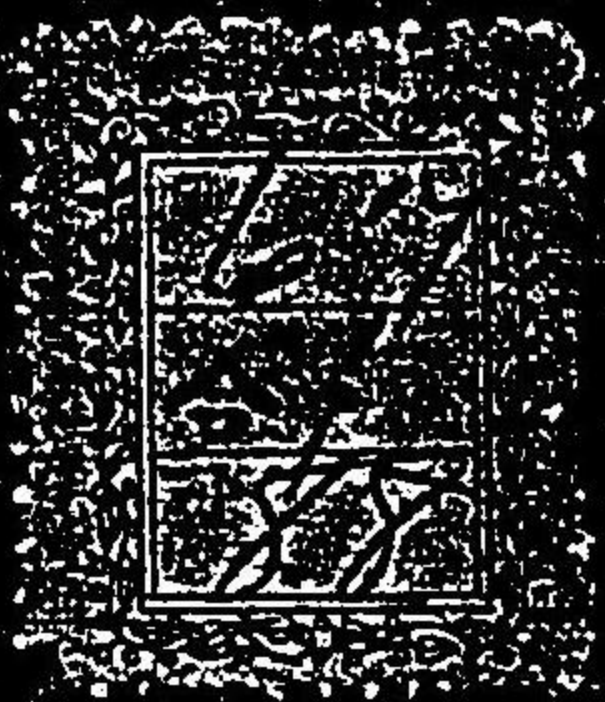
雄辯大家集

剛補訂 本書の舊版正續編中ヨリ英ヲ摘ミ精ヲ擧キテ大家ノ遺稿ヲ纂輯シ且ツ奇像ヲ精鑄シタルモノニシテ前後ノハ辯說總論、辯說術及ヒ集會ニ關セル諸要件ヲ採録セリ殊ニ辯說術中ニハ先ツ各種ノ語法ヲ擧ケ次ニ圖解ヲ以テ勢ヲ示シ演說中各段ノ場合ニ於テ如何ニ頭目手足等ヲ運動スヘキガチ細説ヲタルモノナリ

東京神田雄子町書肆

巖々堂謹白

7



(M)

091811-000-8

67-88

東都八大家戯文 上編

松村操 / 編

M15

DBO-0327



67
合
88

Ⓜ

1000

市都八大家戲文
上編
乾
坤